

近代における仏教の展開：
清沢満之の思想形成の研究
と基礎資料の集成

清沢満之『精神界』所載論文校訂集

代表者 安 富 信 哉

近代仏教の暁星でありまた本学の学祖である清沢満之（1863-1903）の思想ならびにその歴史的意義についてのわが国における研究は、近年めざましく進展している。また1993年8月3日から5日にかけて本学会を会場として開催された国際真宗学会におけるパネル「精神主義の意義—近代における浄土真宗の表現」からも端的に知られるように、清沢満之の思想は海外の学者あるいは宗教者のあいだでも注目され、これについての研究は今後さらに広がりを見せていくことと期待される。

あらためて申すまでもなく、それらの研究において大切なのは清沢自身の諸文を収録した信頼に足るテキストである。清沢没後、その生前の著述や講話あるいは彼についての様々な資料を収録した全集や文集が幾度か出版されてきた。このうち清沢の全集の編集・出版はこれまで3回を数える。それらを示せば、

- (1) 多田鼎・佐々木月樵・暁烏敏校訂『清沢全集』（全3巻）無我山房1913-15
- (2) 浩々洞編『清沢満之全集』（全6巻）有光社1934-35
- (3) 暁烏敏・西村見暁編『清沢満之全集』（全8巻）法蔵館1953-56

である。これらの全集のうち最も新しいものは、暁烏・西村編の八巻本である。しかし残念なことに、八巻本は種々の理由により現在絶版となっており、今後その復刊も期待できない状態である。このことは、清沢満之について研究しようとする学者や学生、また一般の研究者に多大な不便をもたらしている。

本研究班では、とくに近年清沢満之の教学思想についての問いかけが諸方面で惹起したのを契機に、これに応答するべくいくつかのテーマを立てて研究を進めてきた。それは、本学会が清沢を学祖として仰ぎ、のみならずその存在の近代精神史における意義を大変に重要だと考えたからに他ならない。しかしそれ

らの研究を進めていくなかで痛感されたのは、研究のための基礎資料が不十分であるということであった。各方面の清沢研究者に提供することのできる基礎資料をストックしておくことは、本学が負わなければならない当然の責務ではないだろうか。とりわけ信頼に足る正確なテキストを保有・提供することは、なかでも最も重要であろう。

この認識にたつて、わたしたちは、これまで、全集作成を視野に入れながら、基礎資料の収集に努めるとともに、テキストの検討および対校の作業を行ってきた。今回、その経過を報告するに際し、清沢が『精神界』（明治34年～明治36年）に発表した論文に限定した。それは、清沢の生前に活字として公にされたものがほとんどであり、一応清沢の最終稿と認められるからである。ここではこれらの論文について『精神界』を底本として、暁烏・西村編の八巻本と対校し、また自筆原稿のあるものについては、さらにこれを参照した。以上の対校を通して八巻本には、誤植、脱字等いくつかの問題があることが確認された。それらの諸点については、今回この『紀要』の誌面で、校訂した諸文のいくつかを発表する機会を得たので参照していただきたいが、作業を通して気づいた点を1、2挙げれば以下のようなものである。

- ・八巻本では、編集の際に起こったと思われる誤植や脱文がしばしば見られる。
- ・八巻本には、『精神界』の原文を改めた跡がよく窺われるが、表記や句読点についての改訂基準が明瞭でなく、収録文献についても編集の根拠が不明確である。

また、『精神界』それ自体も、句読点の欠落や誤植など資料として十分に検討されなければならない問題があることが確認された。

以上のことから、今後、本学の責任において、信頼に価する『清沢満之全集』を作成するための基礎作業を更に進めてゆくことが必要であると考えられる。

凡 例

- 1 本資料は『精神界』（明治34年～明治36年）を底本とした。
- 2 本資料の対校本は法蔵館版『清沢満之全集』である。
- 3 旧漢字・記号表記は現行の通行体に改めた。
（來—来 様—様 眞—真 まゝ—まま）
- 4 底本における傍点・傍線はとらなかった。
- 5 対校は脚注の形で行った。但し、以下の表記については煩雑を避けるために一々注を付さなかった。
就て—就いて 却て—却つて 反て—反つて 現れ—現はれ
於て—於いて 陳る—陳ぶる 亦—亦た 尚—尚ほ、尚お
皆—皆な 只—只だ 或—或る 扱—扱て 唯一—唯だ
随て—随つて
- 6 略語は以下の通りにする。
㊦—八巻本（『清沢満之全集』全八巻） ㊧—自筆原稿

精神主義

吾人の世に在るや、必ず¹の完全なる立脚地なかるへからず²。若し之なくして、世に処し、事を為さむとするは、恰も浮雲の上に立ちて技芸を演せむ³とするものの如く、其⁴転覆を免るる⁵能はさる⁶こと言を待たさる⁷なり。然らは⁸、⁹吾人は如何にして処世の完全なる立脚地を獲得すべきや、蓋し絶対無限者によるの外ある能はさる¹⁰べし。此の如き無限者の吾人精神内にあるか、精神外にあるかは、吾人之を一偏に¹¹断言するの要を見す¹²。何んと¹³なれば¹⁴彼の絶対無限者は、之を求むる人の之に接する所にあり、¹⁵内とも限るへからず¹⁶、外とも限るへからされはなり¹⁷。吾人は只此の如き無限者に接せされは¹⁸、処世に於ける完全なる立脚地ある能はさる¹⁹ことを云ふのみ。而して此の如き立脚地を得たる精神の発達する条路、之を名けて²⁰精神主義と云ふ²¹。

精神主義は自家の精神内に充足を求むるものなり、²²故に外物を追ひ他人に従ひて、為に煩悶憂苦することなし。而して其²³或は外物を追ひ²⁴他人に従ふ形状あるも、決して自家の不足なるが為に追従するものたるべからず。精神主義を取るものにして、自ら不足を感じることあらんか、其²⁵充足は之を絶対無限者に求むべくして、之を相対有限の人と物とに求むべからざるなり。

然れども²⁶、精神主義は強ちに外物を排斥するものにあらず、²⁷若し外物に対して行動することある場合には、彼の外物の為に煩悶憂苦せざるのみならず、彼の外物は精神の模様に従ひ²⁸自由に之を変転せしめ得べきことを信ずるなり。故に、²⁹彼の『随_二其心浄_一則佛土浄』³⁰とは、是れ善く精神主義の外物に対する見地を表白したるものと云ふ³¹て可なり。

又精神主義は、³²自家の精神を以て必要とするが故に、其³³外貌或は利己の一

1 一—^①一つ 2 へからず—^①べからず 3 演せむ—^①演ぜん 4 其—^①其の 5 免る—^①免るる事 6 能はさる—^①能はざる 7 待たさる—^①待たざる 8 然らば—^①然らば 9 ^①読点なし。 10 能はさる—^①能はざる 11 之を一偏に—^①一偏に之を 12 見す—^①見ず 13 何んと—^①何と 14 なれば—^①なれば 15 ^①読点が句点になっている。 16 へからず—^①べからず 17 へからされはなり—^①べからざればなり 18 されは—^①ざれば 19 能はさる—^①能はざる 20 名けて—^①名づけて 21 云ふ—^①いふ 22 ^①読点が句点になっている。 23 其—^①其の 24 ^①読点あり。 25 其—^①其の 26 然れども—^①然れ共 27 ^①読点が句点になっている。 28 ^①読点あり。 29 ^①読点なし。 30 『 』—^①「 」 31 云ふ—^①いう 32 ^①読点なし。 33 其—^①其の

偏に僻し、他人を排斥するが如きものなきにあらず³⁴。然れども³⁵、精神主義は決して利己一偏を目的とするものにあらず、亦³⁶他人を蔑視するものにあらず。只自家の立脚³⁷をだも確めずして、先づ他人の立脚³⁸を確めんとするの不当なるを信し³⁹、自家の立脚⁴⁰だに確乎たらしむるを得は⁴¹、以て之を人に移し得へき⁴²ことを信し⁴³、勉めて自家の確立を先要⁴⁴とするが精神主義の取る所の順序なり。

故に若し外物又は他人と交際して、自他の幸楽⁴⁵を増進することに至りては、精神主義は決して此⁴⁶事を排斥せず、寧ろ反て之を歓迎するなり。故に精神主義は決して隠遁主義にあらず⁴⁷、亦退嬰主義にもあらざる⁴⁸なり。協共和合⁴⁹によりて、⁵⁰社会国家の福祉を発達せしめんことは、寧ろ精神主義の奨励する所なり。

精神主義は完全なる自由主義なり。若し其⁵¹制限束縛せらるることあらは⁵²、是れ全く自限自縛たるべく、外他の人物の為に制限束縛せらるるにあらざる⁵³べし。自己も完全なる自由を有し、他人も完全なる自由を有し、而して彼の自由と彼の⁵⁴自由と衝突⁵⁵することなきもの、是れ即ち精神主義の交際と云ふべき⁵⁶なり。

而して通常の場合に於ては、彼の自由と我の自由と衝突⁵⁷なき能はさるか如き⁵⁸は何そや⁵⁹、⁶⁰他なし、此の如き自由は完全なる自由にあらざるか⁶¹故に、完全なる服従と平行せざればなり。今精神主義によりて云ふ所の自由は、完全の自由なるか⁶²故に、如何なる場合に於ても、常に絶対的服従と平行するを以て、自由に自家の主張を変更して他人の自由に調和することを得て、決して彼の自由と衝突⁶³することあらざる⁶⁴なり。

然るに此の如き服従の場合に於て、最も注意すべき⁶⁵所の要件あり、煩悶憂苦の有無即ち是なり。此⁶⁶点に就ては精神主義に一種の要義あり、他にあら

34 あらず—①非ず 35 然れども—①然れ共 36 亦—①又 37 立脚—①立脚地
38 立脚—①立脚地 39 信し—①信じ 40 立脚—①立脚地 41 得は—①得ば 42 得へき—①得べき
43 信し—①信じ 44 先要—①專要 45 幸楽—①幸福 46 此—①此の
47 あらず—①あらず 48 あらざる—①あらざる 49 協共和合—①協同和合
50 ①読点なし。 51 其—①其れ 52 あらは—①あらば 53 あらざる—①あらざる
54 彼の—①我の 55 衝突—①衝突 56 云ふへき—①いふべき 57 衝突—①衝突
58 能はさるか如き—①能はざる如き 59 何そや—①何ぞや 60 ①読点が句点になっている。
61 あらざるか—①あらざるが 62 なるか—①なるが 63 衝突—①衝突
64 あらざる—①あらざる 65 すへき—①すべき 66 此—①此の

す⁶⁷、精神主義は総ての煩悶憂苦を以て、全く各人自己の妄念より生ずる⁶⁸幻影と信する⁶⁹にあり。乃ち、精神主義よりして之を云へば⁷⁰、我は外他の人物を苦むる⁷¹こと能はざる⁷²と同じく⁷³、外他の人物は我を苦むる⁷⁴こと能はざる⁷⁵なり。故に或は外他の人物の動作によりて我が苦悩するか⁷⁶如きことあるあるも⁷⁷、精神主義よりして之を云へば⁷⁸、是れ我が吾妄想⁷⁹の為に苦悩するものとし、決して外他人物の為に苦悩するものとせざる⁸⁰なり。(之に反する場合も推して知るべし。)而して此の如き苦悩は、⁸¹畢竟妄念より生ずる⁸²幻影に過ぎざるか⁸³故に、精神主義の実行が進歩するに従ひ、吾人の立脚地の益⁸⁴明確となると共に、彼の苦悩は漸次に減退消散するものたるなり。

之を要するに、精神主義は、⁸⁵吾人の世に処するの実行主義にして、其⁸⁶第一義は、充分なる⁸⁷満足の⁸⁸精神内に求め得べきことを信する⁸⁹にあり。而して其⁹⁰発動する所⁹¹は、外物他人に追従して苦悶⁹²せざるにあり。交際協和して人生の幸樂を増進するにあり、⁹³完全なる自由と絶対的服従とを双運して⁹⁴以て此⁹⁵間に於ける一切の苦患を払掃するに在り⁹⁶

67 あらず—△あらず 68 生ずる—△生ずる 69 信する—△信ずる 70 云へば—△云へば 71 苦むる—△苦しむる 72 能はざる—△能はざる 73 同じく—△同じく 74 苦むる—△苦しむる 75 能はざる—△能はざる 76 するか—△するが 77 あるあるも—△あるも 78 云へば—△云へば 79 我が吾妄想—△我が妄想 80 苦悩するものとせざる—△苦悩せざるものとする 81 △読点なし。 82 生ずる—△生ずる 83 ざるか—△ざるが 84 益—△益々 85 △読点なし。 86 其—△其の 87 充分なる—△充分の 88 満足の—△満足を 89 信する—△信ずる 90 其—△其の 91 所—△ところ 92 苦悶—△苦悩 93 △読点が句点になっている。 94 △読点あり。 95 此—△此の 96 △読点あり。

他力の救済

われ¹、²他力の救済を念する³ときは、我か⁴世に属する⁵の道開け、

⁶われ⁷、⁸他力の救済を忘るるときは、我か⁹世に処するの道閉つ¹⁰。¹¹

われ¹²、¹³他力の救済を念する¹⁴ときは、われ¹⁵物欲の為に迷はさる¹⁶こと
少く、

¹⁷われ¹⁸、¹⁹他力の救済を忘るるときは、われ²⁰、²¹物欲の為に迷はさる²²こ
と多し。²³

われ²⁴、²⁵他力の救済を念する²⁶ときは、我か²⁷処するところに光明輝き²⁸、

²⁹われ³⁰、³¹他力の救済を忘るるときは、我か³²処するところに黒闇覆ふ。³³

嗚呼³⁴他力救済の念は、能く我等³⁵をして迷倒苦悶の娑婆を脱して、悟道³⁶
安樂の浄土に入らしむ³⁷。³⁸我は実にこの³⁹念によりて⁴⁰、⁴¹、⁴²救済されつつあ
り⁴³。⁴⁴若し世に他力救済の教なかりせば。⁴⁵我は終に迷乱と悶絶とを免かれ⁴⁶
さりしならむ。⁴⁷然るに、⁴⁸今や濁浪滔々の闇黒世裡にありて⁴⁹、夙に清風掃々
の光明界⁵⁰に遊ぶ⁵¹を得るもの、⁵²豈⁵³区々たる感謝嘆美の及ぶ⁵⁴所ならんや。⁵⁵

1 われ—^{ワレ}我 ^{ワレ}我 2 ^{ワレ}読点なし。 3 念する—^{ワレ}念ずる 4 我か—^{ワレ}我が ^{ワレ}我が
5 属する—^{ワレ}我 ^{ワレ}我 6 ^{ワレ}改行していない。 7 われ—^{ワレ}我 ^{ワレ}我 8 ^{ワレ}読点なし。 9
我か—^{ワレ}我が ^{ワレ}我が 10 閉つ—^{ワレ}閉づ 11 ^{ワレ}句点が読点になっている。 12 われ—^{ワレ}我
13 ^{ワレ}読点なし。 14 念する—^{ワレ}念ずる 15 われ—^{ワレ}我、^{ワレ}我 16 迷はさる—^{ワレ}迷
さる 17 ^{ワレ}改行していない。 18 われ—^{ワレ}我 ^{ワレ}我 19 ^{ワレ}読点なし。 20 われ—^{ワレ}
^{ワレ}我 21 ^{ワレ}読点あり。 22 迷はさる—^{ワレ}迷さる 23 ^{ワレ}句点が読点になっている。
24 われ—^{ワレ}我 ^{ワレ}我 25 ^{ワレ}読点なし。 26 念する—^{ワレ}念ずる 27 我か—^{ワレ}我が ^{ワレ}我が
28 輝き—^{ワレ}我 ^{ワレ}照し 29 ^{ワレ}改行していない。 30 われ—^{ワレ}我 ^{ワレ}我 31 ^{ワレ}読点なし。
32 我か—^{ワレ}我が ^{ワレ}我が 33 ^{ワレ}句点が読点になっている。 34 ^{ワレ}読点あり。 35 我等—^{ワレ}
^{ワレ}我 36 悟道—^{ワレ}悟達 37 入らしむ—^{ワレ}我 ^{ワレ}入らしむるが如し 38 ^{ワレ}句点が読点に
なっている。 39 この—^{ワレ}此 ^{ワレ}此 40 よりて—^{ワレ}より 41 ^{ワレ}読点あり。 42 ^{ワレ}
^{ワレ}＜現に＞あり。 43 あり—^{ワレ}我 ^{ワレ}あるを感ず 44 ^{ワレ}句点が読点になっている。 45 な
かりせば。—^{ワレ}なかりせば、^{ワレ}なかせば、 46 免かれ—^{ワレ}免れ 47 さりしならむ。—^{ワレ}ざり
しなるべし。^{ワレ}さるべし、 48 ^{ワレ}読点なし。 49 ありて—^{ワレ}我 ^{ワレ}在りて 50 光明界—^{ワレ}
光明海中 ^{ワレ}光明界中 51 遊ぶ—^{ワレ}我 ^{ワレ}遊ぶ 52 ^{ワレ}＜其の大恩高德＞あり。^{ワレ}＜其大恩高
徳、＞あり。 53 豈—^{ワレ}豈に 54 及ぶ—^{ワレ}我 ^{ワレ}及ぶ 55 ^{ワレ}句点が読点になっている。

咯血したる肺病人に与ふるの¹書清沢満之²

拜啓、³其⁴後は方外なる無音に打過ぎ候得共、愈⁵御清康ならんと存居候処、承れば⁶先日は亦⁷復咯血なされ候由、一驚仕候。何卒御経過順好ならんこと⁸を切望致居候。小生も近頃多少咯血の傾向も有之候へども、客冬已来^{9,10}専ら摂養を勉め、蟄伏を主と致居候為め¹¹、先々無難に打過ぎ居り候。昨今は¹²桃や桜の時節と相成り、健全なる人々は、花見や遊覧に打興じ候へ共、此等の事は在病の身には¹³到底及び難きことに候ゆへにや、一向此が為め心を動かさるることも無之¹⁴結句安静を悦び得ることに有之候。シカシ^{15,16}病人にても余り徒然にては¹⁷却て種々のことに心念を勞する様になり易く、特に咯血状態の時は¹⁸神経も一層過敏に有之候へば、其¹⁹際は心念の方向を誤らぬ様²⁰注意致候事が、²¹最も必要と存候。其²²心念の方向と申すは、兼て御承知の如く、大体に於ては自分が病人であると云ふことを打忘れて、健全の人の如くに²³色々の事に心配することの²⁴なき様にすることに候へども、只此の如き大体の考のみにては²⁵余り漠然と致居候ゆへ、自然に忘れ勝に相成候様存候。小生は此²⁶大体の一方針を²⁷三個条の要件として²⁸之を注意致候事が、精神的保養の好方便と相感じ居候。実は一度参上致して、此²⁹話杯申上候はば³⁰宜敷かとも存候得³¹共³²御容体³³の程も量り兼候ゆへ、左に之を記して差上置候事と致候間、御気分のすすみたる時に³⁴御一読可被下候。

第一条 人生の義務責任に就て安心すべき事

我等は人間として³⁵各自に社会に何か貢献すべき責任がある、³⁶又³⁷相互の交際上³⁸夫々の義務を尽さねばならぬと云ふことで、所謂忠孝仁義等の念慮より奮発勉勵するが³⁹通常の道徳となりて居る。此は実に結構な事なれとも⁴⁰、之

1 ①<の>なし。 2 ①<清沢満之>なし。 3 ①読点が句点になっている。 4 其—①其の 5 愈—①愈ゝ 6 ①読点あり。 7 亦—①又 8 こと—①事 9 已来—①已来 10 ①読点あり。 11 為め—①為 12 ①読点あり。 13 ①読点あり。 14 ①読点あり。 15 シカシ—①しかし 16 ①読点あり。 17 ①読点あり。 18 ①読点あり。 19 其—①其の 20 ①読点あり。 21 ①読点なし。 22 其—①其の 23 ①読点あり。 24 ①<の>なし。 25 ①読点あり。 26 此—①此の 27 ①読点あり。 28 ①読点あり。 29 此—①此の 30 ①読点あり。 31 候得—①候へ 32 ①読点あり。 33 容体—①容態 34 ①読点あり。 35 ①読点あり。 36 ①読点が句点になっている。 37 ①読点あり。 38 ①読点あり。 39 ①読点あり。 40 なれとも—①なれども

を完全に遂行すること⁴¹は不可能であるので、誰⁴²人でも唯⁴³之を標的として⁴⁴出来得る丈のこと⁴⁵をなすに過ぎないことである。所謂道德の実行は⁴⁶一の理想に過ぎないこと⁴⁷なれども、通常は其⁴⁸理想を揭示して、各人の奮勉を奨励することである。然るに身体も健康⁴⁹にして⁵⁰精神も強盛なる人々は、此の如き理想に誘導せられて⁵¹奮進することを得れども⁵²、肺病人杯は⁵³此処を一つ常に能く思案せねばならぬ。道德⁵⁴を踐行するには⁵⁵時によりては⁵⁶智慧も必要であり、体力も必要であり、⁵⁷金銭等も必要である。然るに⁵⁸肺病人杯は、先づ⁵⁹第一に身体が間に合はぬ、又智慧も充分には働く勢力がない、随て又金銭等に就て⁶⁰、色々と経営することも出来ぬ。故に⁶¹健強なる人々ですら⁶²充分には実行の出来ない忠孝仁義等の義務責任が、肺病人杯の出来得る筈がない。況んや⁶³義務責任と云へば結構なれども、其⁶⁴実際の場合に就て見るときは⁶⁵真道德と偽道德とが混乱し易く、社会の為、人道の為と云ひながら、名利勝他の念を脱却し難くして、所謂健強の人々に於ても、世上の忠孝仁義は寧ろ煩悶の種となること多きことであるを思へば、尚更⁶⁶肺病人杯は其⁶⁷病氣病養⁶⁸の為には、断して⁶⁹世間の義理人情の為に悩まされることなき様に注意することが必要である。肺病人杯は⁷⁰どんな薬が必要であるかと云へば⁷¹、先づ多少世事人情を解するもの⁷²にありては⁷³其⁷⁴世事人情に就て義務責任の念を抛棄することか⁷⁵大妙薬であると云ふべきである⁷⁶然るに⁷⁷此の如く云へば⁷⁸人間として道德の念を抛棄する位なれば⁷⁹生きて居るよりは寧ろ死んだ方がよい、苟も人間として生きて居る以上は⁸⁰決して不道德を是認することは出来ぬ、況んや我身⁸¹自ら⁸²不道德を甘ずることをやと云ふ人があるかも知れぬ。此の如く云ふ人は⁸³道德妄想の為に⁸⁴自ら死を急ぐ人でありて⁸⁵道德を思ひながら、実際に於て大不徳を実行する人である。何んと⁸⁶なれば⁸⁷肺病人杯の無能力者が⁸⁸

41 こと一〇事 42 誰一〇誰れ 43 〇<唯>なし。 44 〇読点あり。 45 こと一〇事 46 〇読点あり。 47 こと一〇事 48 其一〇其の 49 健康一〇健強 50 〇読点あり。 51 〇読点あり。 52 とも一〇ども 53 〇読点あり。 54 〇改行している。 55 〇読点あり。 56 よりては一〇よりて、 57 〇<体力も必要であり、>なし。 58 〇読点あり。 59 先づ一〇先づ 60 〇読点なし。 61 〇読点あり。 62 〇読点あり。 63 〇読点あり。 64 其一〇其の 65 〇読点あり。 66 〇読点あり。 67 其一〇其の 68 病養一〇療養 69 断して一〇断じて 70 〇読点あり。 71 云へは一〇云へば 72 もの一〇者 73 〇読点あり。 74 其一〇其の 75 ことか一〇ことが 76 〇句点あり。 77 〇読点あり。 78 〇読点あり。 79 〇読点あり。 80 〇読点あり。 81 我身一〇我が身 82 〇読点あり。 83 〇読点あり。 84 〇読点あり。 85 〇読点あり。 86 何んと一〇何と 87 〇読点あり。 88 〇読点あり。

道德のことを盛に思へば思ふ程⁸⁹自ら煩悶に陥り⁹⁰苦悩を増し⁹¹為に治すべき病氣をも不治の状態に進めて、終に死亡に至ることである。人間社会の為に尽さんとするは⁹²命ありてのことである。然るを⁹³自ら死を急ぐは、是れ尽すべき根柢を絶滅するのである。世間此に過ぎたる不徳はない。尚一つ道德妄想に陥れる人に注意すべきは⁹⁴道德の念を抛棄せよと云ふは不道德の念に入れと云ふのではないと云ふことである。若し誤り易ければ⁹⁵道德不道德と云ふことに関する思想を抛棄せよ⁹⁶と云ふ⁹⁷て差支はない。語を換ゆれば^{98,99}道德不道德の思想を超越したる天地に¹⁰⁰其¹⁰¹心安ぜよ¹⁰²と云ふのである。

第二条 医薬飲食看護等の事に安心すべき事

病氣と云へば、直に¹⁰³医者ちや、薬ちや、滋養ちや、看護ちやと云ふ事になる。夫¹⁰⁴が貧家では充分なことは出来ぬが¹⁰⁵富裕な家では医者二三名は無論のこと、¹⁰⁶看護婦やら、看病人やら、父母やら、兄弟姉妹やら、親類縁者やら、種々様々の人が寄り添ふ¹⁰⁷て居て、彼の薬、此の滋養品¹⁰⁸、何時には何々、何時には何々と、実に非常なる心尽しである。然るに¹⁰⁹余り掛り手の多きが為に、却て色々の混雑や¹¹⁰困難を生ずることがある。時によると¹¹¹第一たる¹¹²医者の意見が彼此相違することがある。随てどちらの薬を服してよいか¹¹³分らぬ様なこともある。又親や兄弟杯の中に¹¹⁴熱心なる一種の信者がありて¹¹⁵某所の点灸がよいの、某寺の霊薬がよいのと、色々に勧められる時には、病人は随分迷惑することがある¹¹⁶其¹¹⁷他種々の場合は¹¹⁸一々列举することは出来ざれども。¹¹⁹保護親切の為に¹²⁰却て病人の迷惑することは少くはない。特に¹²¹肺病人の咯血状態にありて、神経過敏に陥りて居るものにありては¹²²何だか人の親切を無にする様では心苦しく、何でも医者を始め、看護婦等の指命を¹²³正直に服膺せねばならぬと云ふ念慮を勞することである。此の如きは¹²⁴勿論よきことには違ひないが、一つ心得置べき要点がある。夫¹²⁵

89 ㊦読点あり。 90 ㊦読点あり。 91 ㊦読点あり。 92 ㊦読点あり。 93 ㊦読点あり。 94 ㊦読点あり。 95 ㊦読点あり。 96 ㊦読点あり。 97 云ふ—㊦云う 98 換ゆれば—㊦換ふれば 99 ㊦読点あり。 100 ㊦読点あり。 101 其—㊦其の 102 安ぜよ—㊦安んぜよ 103 直に—㊦直ちに 104 夫—㊦夫れ 105 ㊦読点あり。 106 ㊦読点なし。 107 添ふ—㊦添う 108 滋養品—㊦滋養 109 ㊦読点あり。 110 ㊦読点あり。 111 ㊦読点あり。 112 第一たる—㊦第一に、 113 よいだから—㊦よいのか、 114 ㊦読点あり。 115 ㊦読点あり。 116 句点あり。 117 其—㊦其の 118 ㊦読点あり。 119 ㊦句点が読点になっている。 120 ㊦読点あり。 121 特に—㊦殊に、 122 ㊦読点あり。 123 ㊦読点あり。 124 ㊦読点あり。 125 夫—㊦夫れ

は外の義ではない、¹²⁶医薬や滋養や¹²⁷看護杯と云ふことは、只幾分其¹²⁸効能のあるのみのもの¹²⁹で、決して大層な妙用のあるものではないと云ふことである。勿論肺病には妙薬はないと云ふことは、医者の方からも公言して聞かする¹³⁰ことではあるが、病人自身に¹³¹其¹³²事を充分記念¹³³して忘れぬ様にする必要がある。仍て¹³⁴肺病人は寧ろ自分の気促を尽して¹³⁵差支ないものであると云ふことを¹³⁶病人も其¹³⁷他の人々も¹³⁸共に能く承知して居るがよい。第一条の下にて¹³⁹義務や責任の事を申したことであるが、今亦其と同様で、医者だの¹⁴⁰薬だの、滋養だの、看護だのに対して、自分の気に合はぬものを¹⁴¹強て¹⁴²受用すると云ふ様な遠慮心を抛棄するが¹⁴³肺病療養の一要義である。いやなとき¹⁴⁴には医者の来診を受けぬでもよい。¹⁴⁵飲みたくない薬は飲まなくてもよい。此の如き心得を本として居りて、気の向いた時に、¹⁴⁶医者の診察を受け、口に適ふたる薬を服用すれば、存外に医薬の効能も顕はるることである。滋養の如きも¹⁴⁷医者が何を何程宛と指図してあるから、何でも其¹⁴⁸通りにせねばならぬ杯と思ふに及ばぬ。自分の口や腹との相談で¹⁴⁹好きなもの¹⁵⁰を用ゐる¹⁵¹がよい¹⁵²運動でも、睡眠でも¹⁵³読書でも、談話でも、何でも自分の気分¹⁵⁴に¹⁵⁴称ふ様にするがよい。然るに¹⁵⁵此に就て¹⁵⁶尚一つ心頭を悩ますことがあり易いのは¹⁵⁷此の如くにして¹⁵⁸余り気随気促を尽し¹⁵⁹得手勝手に流る様になると医者を始め皆のものが愛相をつかして顧みて呉れない様になると¹⁶⁰困ると云ふことである。此は実に人間に於ての一大弱点であるので¹⁶¹此¹⁶²弱点に就て¹⁶³一段の決着が出来ぬ間は、此¹⁶⁴個条¹⁶⁵のみでなく、第一条のことも¹⁶⁶皆出来ないことになる次第である。第三条は其¹⁶⁷事を述ぶるのである。

第三条 最後の救済に就て安心すべき事

126 ㊦読点が句点になっている。 127 ㊦読点あり。 128 其—㊦其の 129 もの—㊦者 130 聞かする—㊦聞かす 131 ㊦読点あり。 132 其—㊦其の 133 記念—㊦記憶 134 ㊦読点あり。 135 ㊦読点あり。 136 ㊦読点あり。 137 其—㊦其の 138 ㊦読点あり。 139 ㊦読点あり。 140 ㊦読点あり。 141 ㊦読点あり。 142 強て—㊦強ひて 143 ㊦読点あり。 144 とき—㊦時 145 ㊦句点が読点になっている。 146 ㊦読点なし。 147 ㊦読点あり。 148 其—㊦其の 149 ㊦読点あり。 150 もの—㊦物 151 用ゐる—㊦用ゐる 152 ㊦句点あり。 153 ㊦読点あり。 154 気分—㊦分に 155 ㊦読点あり。 156 ㊦読点あり。 157 ㊦読点あり。 158 ㊦読点あり。 159 ㊦読点あり。 160 ㊦<医者を始め皆のものが愛相をつかして顧みて呉れない様になると>なし。 161 ㊦読点あり。 162 此—㊦此の 163 ㊦読点あり。 164 此—㊦此の 165 個条—㊦箇条 166 ㊦読点あり。 167 其—㊦其の

世事人情に関する念慮を棄てて¹⁶⁸氣随氣促を尽せば、人が愛相¹⁶⁹をつかして、¹⁷⁰顧みて呉れまいとの恐れは尤な¹⁷¹ことなれども、肺病人が其を案じて居る様では¹⁷²病気の為には甚だ有害である。世事人情を充分に能く治めて行くことは¹⁷³容易に出来ることでない。氣随氣儘¹⁷⁴を少しもせぬ様にと云はば¹⁷⁵是¹⁷⁶程心配なことはない。其¹⁷⁷故は¹⁷⁸何れも我¹⁷⁹以外に向て¹⁸⁰心を勞せなければならぬ上に、如何に心を勞しても、其で他より完全と認らる¹⁸¹ことは殆んど¹⁸²ない。よしや¹⁸³他人は実際に充分であると認めて居ても、尚こちらより¹⁸⁴他人は決して充分と思ふまひ¹⁸⁵と案じて見れば、到底落ちつきの出来るものではない¹⁸⁶肺病人はそんな心勞をせない様に¹⁸⁷最後の安心を得ることが必要である^{188, 189}然るに¹⁹⁰此処に一つ能く注意すべきことがある¹⁹¹其は世事人情に関する念慮を棄てて、氣随氣促を尽すと云ふことは、決して世事人情に反対して、之を攻撃したり¹⁹²排斥したりするのではない、¹⁹³氣随氣促と云ふも¹⁹⁴只自分一身上の事に就てするのである。即ち¹⁹⁵言葉を換へて云へば¹⁹⁶、自家の自由の範囲内に属する事に就て¹⁹⁷之を為すのである。其も最後の安心を得ず¹⁹⁸してすれば、其は全く無謀のことで、却て苦痛の種となる訳なれとも¹⁹⁹、最後の安心の上に坐り²⁰⁰てする時には、其²⁰¹憂はないのみならず、総てのこと²⁰²が自然の実情より出づる²⁰³働きとなるが故に²⁰⁴他より之を觀ても²⁰⁵決して世に背き人に反くと云ふ様なことにはならぬ²⁰⁶即ち茲に至りては²⁰⁷肺病人も他の健康者と同様に²⁰⁸人間社会に並び立て²⁰⁹、一種の意義を以て生存することを得ることである。其²¹⁰意義と云ふのは²¹¹外のことではない。社会の組織上に²¹²種々の差別はあれとも^{213, 214}畢竟²¹⁵人生の根本問題たる一大事件

168 ㊦読点あり。 169 愛相—㊦愛想 170 ㊦読点なし。 171 尤な—㊦尤もな
172 ㊦読点あり。 173 ㊦読点あり。 174 氣儘—㊦氣尽 175 ㊦読点あり。 176
是—㊦是れ 177 其—㊦其の 178 ㊦読点あり。 179 我—㊦我れ 180 向て—㊦
向つて 181 認らる—㊦認めらる 182 殆んど—㊦殆ど 183 ㊦読点あり。
184 ㊦読点あり。 185 思ふまひ—㊦思ふまい 186 ㊦句点あり。 187 ㊦読点あり。
188 ㊦句点あり。 189 ㊦改行している。 190 ㊦読点あり。 191 ㊦句点あり。
192 ㊦読点あり。 193 ㊦読点が句点になっている。 194 ㊦読点あり。 195 ㊦読点
あり。 196 云へば—㊦云へば 197 ㊦読点あり。 198 得ず—㊦得ず 199 なれと
も—㊦なれども 200 坐り—㊦座り 201 其—㊦其の 202 こと—㊦事 203 出づ
る—㊦出づる 204 ㊦読点あり。 205 ㊦読点あり。 206 ㊦句点あり。 207 ㊦読
点あり。 208 ㊦読点あり。 209 立て—㊦立つて 210 其—㊦其の 211 ㊦読点あ
り。 212 ㊦読点あり。 213 と—㊦ども 214 ㊦読点あり。 215 ㊦読点あり。

を解決して²¹⁶各々に其の境遇に²¹⁷之を²¹⁸之を実現することである。²¹⁹さて其の一大事件たる最後の安心に就て、仏教者では諸行無常とか、恩愛別離とか云ふ²²⁰て、人間の生命の²²¹少いことを唱導して居ることとなるが、今²²²世事人情だの医薬療養²²³だのと云ふことも、到底永遠に生命を繋ぎ留むる効力のあるものではない、²²⁴他人の親切だの²²⁵愛情だのと云ふ²²⁶ても、畢竟暫時の間のことである、²²⁷如何に人間相互の間に親切があつても²²⁸愛情がありても、我等は其に依て^{229, 230}永久の安心を得ることは出来ない。若し人力によりて最後の安心が出来るものなれば^{231, 232}我は我²³³自身の能力で安心が出来る筈である。若し人情によりて最後の²³⁴安心が出来るものなれば^{235, 236}我は我自身の心情によりて安心ができる筈である。若し人力や人情によりて安心ができるものなれば²³⁷我は我²³⁸自身の能力や²³⁹我²⁴⁰自身の心情によりて安心すべきが故に、決して他人の顧みて呉れるか²⁴¹呉れぬかを心配する必要はない筈である。然るに²⁴²我等は最後の安心の事²⁴³は中々思はずして、動もすれば²⁴⁴直に²⁴⁵他人が顧みて呉れるか²⁴⁶呉れぬかと云ふ様なことを心配し、或は我²⁴⁷食物は²⁴⁸あるかなきか²⁴⁹と云ふことを心配することである。此は最後の安心を求むるの道行きである様になれば^{250, 251}頗るよきことなれども、若し然らず²⁵²して²⁵³唯徒らに心配するのみなれば^{254, 255}頗るつまらなきことである。肺病人²⁵⁶は²⁵⁷別して其つまらなき方に陥らぬ様²⁵⁸注意せねば²⁵⁹ならぬ。其には²⁶⁰是非とも最後の安心を確定することが必要である。²⁶¹さて最後の安心を求むと云へば、頗る困難なることの様で、うつかり其²⁶²事に掛れば²⁶³非常に精神を勞して²⁶⁴為に病勢を盛ならしむる様に思ふ人もあるべけれども²⁶⁵決してさうではない。

216 ㊦読点あり。 217 応して—㊦応じて 218 ㊦読点あり。 219 ㊦改行している。
 220 云ふ—㊦云う 221 恃み—㊦頼み 222 ㊦読点あり。 223 療養—㊦飲食
 224 ㊦読点が句点になっている。 225 ㊦読点あり。 226 云ふ—㊦云う 227 ㊦読点
 が句点になっている。 228 ㊦読点あり。 229 依て—㊦依つて 230 ㊦読点あり。
 231 なれば—㊦なれば 232 ㊦読点あり。 233 我—㊦我れ 234 ㊦＜最後の＞なし。
 235 なれば—㊦なれば 236 ㊦読点あり。 237 ㊦＜我は我自身の心情によりて安心がで
 ける筈である。若し人力や人情によりて安心ができるものなれば＞なし。 238 我—㊦我れ
 239 ㊦読点あり。 240 我—㊦我れ 241 ㊦読点あり。 242 ㊦読点あり。 243
 すれば—㊦すれば 244 直に—㊦直ちに 245 ㊦読点あり。 246 我—㊦我が 247
 ㊦＜食物は＞なし。 248 なれば—㊦なれば 249 ㊦読点あり。 250 然らず—㊦然ら
 ず 251 ㊦読点あり。 252 なれば—㊦なれば 253 ㊦読点あり。 254 ㊦読点あ
 り。 255 ㊦読点あり。 256 せねば—㊦せねば 257 ㊦読点あり。 258 ㊦改行し
 ている。 259 其—㊦其の 260 ㊦読点あり。 261 ㊦読点あり。 262 ㊦読点あり。

其²⁶³故を²⁶⁴如何²⁶⁵と云ふに²⁶⁶此²⁶⁷事は通常一般の世事と異なるものであるから、此²⁶⁸事を思案するときは²⁶⁹精神が丸で別天地へ這入る様な都合でありて²⁷⁰其²⁷¹結果²⁷²今迄に疲労せざる能力を運転する事となり²⁷³其²⁷⁴間に²⁷⁵今迄疲労したる能力を休養させる様な塩梅にて、差引勘定して²⁷⁶結局病氣療養の一法となることである。しかし²⁷⁷此はただ精神の過勞にならぬと云ふ点丈を云ふのであるが、尚一步進みて云ふときは²⁷⁸更に大切なる必要がある。其は此²⁷⁹問題は人生の根本問題であるから、此²⁸⁰問題に就ての思念が明白であれば²⁸¹、其が生活作用の総ての方面に大なる氣力を与へて²⁸²心身を快豁ならしむるに反して、若し²⁸³此²⁸⁴問題に就ての思念が曖昧であれば^{285, 286}生活作用を総ての方面に於て²⁸⁷鈍渋ならしむる次第であるが²⁸⁸病氣の時²⁸⁹特に咯血状態杯の時は²⁹⁰此²⁹¹影響は頗る大なるもの²⁹²である²⁹³宗教の道に入らざる青年が²⁹⁴肺病の為に早く斃る原因の²⁹⁵は²⁹⁶確に此²⁹⁷関係である様である²⁹⁸特に²⁹⁹青年は宗教に冷淡なものが多く、其³⁰⁰両親杯も病氣に罹りた者に³⁰¹俄に宗教の話でも聞かすれば、或は最早生存の見込が少くなりた³⁰²から、此³⁰³様な話を聞かざるのであると思はしむる様では³⁰⁴病勢を盛ならしむる様に思ふ³⁰⁵て、両親杯は成るべく³⁰⁶そんな縁のない様に注意することあるが為に、病人は徒然であるから³⁰⁷世事情等に就て余計な心勞に陥り、終に両親等³⁰⁸の慈愛の為に、却て病勢を増進せしむる都合となり、さて死際³⁰⁹の念仏で³¹⁰病人自ら宗教の事を求め、人生の大問題を思ふ³¹¹様になりても、最早心身共に疲労の極に近づき、折角聞きながら³¹²平常の修養がなき為に、充分には分らずして死んで仕舞ふ様なことになるのである。此は畢竟するに^{313, 314}人生觀の決定³¹⁵

263 其—①其の 264 故を—①故は 265 如何—①如何に 266 ①読点あり。
 267 此—①此の 268 此—①此の 269 ①読点あり。 270 ①読点あり。 271 其—①其の
 272 ①読点あり。 273 ①読点あり。 274 其—①其の 275 ①読点あり。
 276 ①読点あり。 277 ①読点あり。 278 ①読点あり。 279 此—①此の
 280 此—①此の 281 あれば—①あれば 282 ①読点あり。 283 ①読点あり。
 284 此—①此の 285 あれば—①あれば 286 ①読点あり。 287 ①読点あり。
 288 ①読点あり。 289 ①読点あり。 290 ①読点あり。 291 此—①此の 292
 もの—①者 293 ①句点あり。 294 ①読点あり。 295 一—①一つ 296 ①読点
 あり。 297 此—①此の 298 ①句点あり。 299 ①読点あり。 300 其—①其の
 301 ①読点あり。 302 なりた—①なつた 303 此—①此の 304 ①読点あり。
 305 思ふ—①思う 306 ①読点あり。 307 ①読点あり。 308 ①<等>なし。
 309 ①ルビなし。 310 ①読点あり。 311 を思ふ—①といふ 312 ①読点あり。
 313 畢竟するに—①畢竟するに 314 ①読点あり。 315 ①読点あり。

即ち宗教の要義を等閑にするより起る一弊である。勿論³¹⁶今日迄の宗教の勧め方では、宗教は老人には必要なるも、青年には必要でないかの如く聞ゆる様な説き振りもありた³¹⁷様なれば、自然前陳の如き流弊も免かれ難き次第なれども、宗教は決してさう云ふものではなく、大体が³¹⁸人生とは何ぞやと云ふ問題に就て、特に各個人に我生は是れ何物ぞやと云ふ問題に就て³¹⁹其³²⁰決定を為さしむるものであるから、今日我等が活動して居る其³²¹活動の根本を解決するのでありて、其³²²解決が自然に必然に我³²³死とは何ぞや³²⁴我³²⁵死後の境界如何と云ふ事に及ぶのである。然るに³²⁶今³²⁷咯血状態に在る肺病人抔は、何れにしても此³²⁸問題を思案することによりて³²⁹大に³³⁰自ら益することである。病気が軽快して、人生の活動に復するに就ても、此³³¹思念は非常なる利益を与へ、病気が漸進して最早人生を辞別せんとするに就ては、此³³²思念は実に最後の幸樂を与ふことである。さて其³³³最後の安心を確定する方法は如何にと³³⁴云へば³³⁵此は通常南無阿弥陀仏と云ふ六文字³³⁶の意義を聞知することによりて出来ると云ふのであるが、今³³⁷語を換へて云へば、我等は到底我等自らの力で³³⁸生死の大事を左右することは出来ぬが故に、他の救済主の力に依るより外はない、其³³⁹他の救済主とは誰なるや³⁴⁰、則ち阿弥陀仏である。そこで³⁴¹阿弥陀仏とは一体何物³⁴²であるかと云ふに。³⁴³畢竟³⁴⁴我等を救済するに就て最上の³⁴⁵能力者であるのである^{346, 347}『摂取^{シテ}不^レ捨^ル捨故^ニ名^ク阿弥陀^ト』³⁴⁸と云ふ³⁴⁹である。又『彼仏光明無量^{ニシテ}照^ス十方^ノ国^ヲ、無^シ所^ニ障礙^{スル}是^ノ故^ニ号^{シテ}為^ス阿弥陀^ト』³⁵⁰とも云ふ³⁵¹である。要するに³⁵²我を救済するに就ての完全なる能力者が³⁵³即ち阿弥陀仏である、³⁵⁴我が我³⁵⁵自ら救済することが

316 ㊤読点あり。 317 ありた—㊤あつた 318 ㊤読点あり。 319 ㊤<特に各個人に我生は是れ何物ぞやと云ふ問題に就て>なし。 320 其—㊤其の 321 其—㊤其の 322 其—㊤其の 323 我—㊤我が 324 ㊤読点あり。 325 我—㊤我が 326 ㊤読点あり。 327 ㊤読点あり。 328 此—㊤此の 329 ㊤読点あり。 330 大に—㊤大いに 331 此—㊤此の 332 此—㊤此の 333 其—㊤其の 334 如何にと—㊤如何と 335 ㊤読点あり。 336 六文字—㊤六字 337 ㊤読点あり。 338 ㊤読点あり。 339 の力に依るより外はない、其—㊤をたのまねばならぬ。 340 や—㊤か 341 ㊤読点あり。 342 何物—㊤如何なる方 343 ㊤句点が読点になっている。 344 ㊤読点あり。 345 ㊤<の>あり。 346 ㊤<のである>なし。 347 ㊤句点あり。 348 『摂取^{シテ}不^レ捨^ル捨故^ニ名^ク阿弥陀^ト』—㊤「摂取^{シテ}不^レ捨^ル捨^テ故^ニ、名^ク阿弥陀^ト。」 349 云ふ—㊤云う 350 『彼仏光明無量^{ニシテ}照^ス十方^ノ国^ヲ、無^シ所^ニ障礙^{スル}是^ノ故^ニ号^{シテ}為^ス阿弥陀^ト』—㊤「彼仏光明無量、^{ニシテ}照^ス十方^ノ国^ヲ無^シ所^ニ障礙^{スル}、是^ノ故^ニ号^{シテ}為^ス阿弥陀^ト。」 351 云ふ—㊤云う 352 ㊤読点あり。 353 ㊤読点あり。 354 ㊤読点が句点になっている。 355 我—我れ

出来ないと言ふことが明³⁵⁶になれば³⁵⁷阿弥陀仏の救済を信ずることにならなければ³⁵⁸到底最後の安心の確定は出来ぬ³⁵⁹其³⁶⁰出来ると出来ぬとは³⁶¹各人の自修自得によることであるから、茲に喋々することは出来ぬが、南無阿弥陀仏と云ふ³⁶²六字の意義に就て述ぶれば、際限なき説明も出来、又其³⁶³意義よりして安心を得たる以上の事に就ての説述も沢山あれど³⁶⁴其等は畢竟外面の形容に過ぎざることゆへ、各自の希望によりて³⁶⁵之を求むるを可とすることである。極めて必要な所は³⁶⁶前陳の数言³⁶⁷よりして推究し得らるることである。

356 明一△明らか 357 △読点あり。 358 △読点あり。 359 △句点あり。 360 其一△其の 361 △読点あり。 362 云ふ一△いふ 363 其一△其の 364 △読点あり。 365 △読点あり。 366 △読点あり。 367 数言一△数件

宗教的道德（俗諦）と普通道德との交渉

清沢満之¹

道德は人世の最大事であると云はるるのに²『精神界』紙上では³之を尊重せざるのみならず、却て之を破壊せんとするが如き傾向あることは⁴如何なる次第なるや⁵と云ふ様な疑問を⁶提出せらるる人が少くない。或は又⁷真宗には真俗二諦と云ふことがありて、其⁸俗諦と云ふは、全く人倫道德の教である、⁹然るに¹⁰『精神界』の記者等は¹¹之を領せずして、徒らに真諦のみを唱導するは偏頗の失あるのみならず、真宗の国家社会に対する効益を失はしむるものであると¹²論難する人もある。以下少しく道德と俗諦に¹³就て¹⁴自分の感じ¹⁵居る所を陳べませう。

全体¹⁶真俗二諦と云ふ教は、甚深微妙の教でありて、而も亦頗る通俗の態度がある教である。故にドーカ¹⁷すると¹⁸其¹⁹通俗の方面のみを耳に入れて²⁰其²¹深妙なる方面を領解せざる人があることである。其²²詳細は²³一寸数言のみにては尽し難いが²⁴ザット²⁵其²⁶梗概²⁷を一言すれば、仏法の大体は勿論人道より進み入り、小乗大乘顕教密教²⁸等²⁹ありとあらゆる教法を整へたる上に、尚其³⁰中に入る能はざる者の為に³¹最後の唯一法門を以て³²一切衆生を一個も漏さず³³救済するの道が³⁴即ち仏陀大悲のあらん限りを尽したる真俗二諦の教法であるのである。故に真俗二諦の教法が³⁵世の所謂倫理道德を超絶したるものなることは無論であるが、其³⁶俗諦門と云ふものに妙趣の存ずる³⁷ことは³⁸実に驚歎³⁹すべき所である。

倫理であれ、宗教であれ、凡そ世の中に教と云はるるものは⁴⁰皆吾人の心に存する善惡の思念を基本とするものでありて、其⁴¹善を進め⁴²、惡を制し、以

1 ㊦＜清沢満之＞なし。 2 ㊦読点あり。 3 『精神界』紙上では—㊦私共は 4 ㊦読点あり。 5 や—㊦が 6 ㊦読点あり。 7 ㊦読点あり。 8 其—㊦其の 9 ㊦読点が句点になっている。 10 ㊦読点あり。 11 『精神界』の記者等は—㊦今 12 ㊦読点あり。 13 俗諦に—㊦俗諦とに 14 ㊦読点あり。 15 感じ—㊦感じて 16 ㊦読点あり。 17 ドーカ—㊦どうか 18 ㊦読点あり。 19 其—㊦其の 20 ㊦読点あり。 21 其—㊦其の 22 其—㊦其の 23 ㊦読点あり。 24 ㊦読点あり。 25 ザット—㊦ざつと 26 其—㊦其の 27 梗概—㊦梗概 28 小乗大乘顕教密教—㊦小乗・大乘・顕教・密教 29 ㊦読点あり。 30 其—㊦其の 31 ㊦読点あり。 32 ㊦読点あり。 33 漏さず—㊦漏らさず 34 ㊦読点あり。 35 ㊦読点あり。 36 其—㊦其の 37 存ずる—㊦存する 38 ㊦読点あり。 39 驚歎—㊦驚嘆 40 ㊦読点あり。 41 其—㊦其の 42 進め—㊦勧め

て此⁴³心の安泰を得せしめん⁴⁴とするを目的とするものである。他の方面より云へば⁴⁵吾人は苦を離れて楽を得んとするものであるが、其⁴⁶苦楽の中に於て⁴⁷此⁴⁸善惡の事に関する苦楽が⁴⁹最も優勢な⁵⁰ものであるから、此⁵¹苦楽に就て一定の安住所を得させんとするのが⁵²世の中の教と云ふものである。

扱⁵³如何なることが善で⁵⁴如何なることが惡であるかと云ふことは、別に論のない様なことで、普通の人は皆極りきつてある様に思ふ⁵⁵て居れど、学者の研究によりて見ると⁵⁶中々そう⁵⁷極りきつては居らぬ。甲の国で善とすることを、乙の国では之を惡とする様なこともあれば、其⁵⁸反対のこともあり。⁵⁹前の時代に⁶⁰善としたることを、後の時代には之を惡とすることもあり、亦其⁶¹反対のこともある。そう⁶²云ふ様なことからして、果して如何なることが眞の善でありて、如何なることが実の⁶³惡であるかと云ふ様な疑問も起ることではあるが、今実地の道德とか⁶⁴宗教とか云ふ教法を云ふ時には⁶⁵ソナ⁶⁶議論や疑問はドーデモ⁶⁷構はない⁶⁸。実地の道德や宗教を云ふときには⁶⁹自分の生れない前の時代や⁷⁰自分の住はない⁷¹他国のことは用はない。今目前にどう云ふ行ひを為すかと云ふが要点である。其⁷²時には外のこと⁷³は構ふ⁷⁴て居れぬ⁷⁵。只自分の胸に於て⁷⁶此は善と思ふのが善で、此は惡と思ふのが惡である。其⁷⁷善と思ふことは之を行ひ、惡と思ふことは之を行はぬことが常に出来れば、道德も⁷⁸宗教も皆其⁷⁹処に含まれて居ることである。

所が⁸⁰道德や宗教の事が、世に六ヶ敷⁸¹云はるるは⁸²何故であるかと云ふに、人々が自分自分に善惡のことを⁸³眞面目⁸⁴に実行せんとするとき、其が中々思ふ通り充分には出来ないと思ふことが知らる様になる。つとむればつとむる程、いよいよ実行の困難が明⁸⁵になる。而して其⁸⁶困難が進むと共に⁸⁷其に就ての思案を盛にする様になる。思案を盛にする様になれば、善惡のことに就

43 此—①此の 44 得せしめん—①得しめん 45 ①読点あり。 46 其—①其の
47 ①読点あり。 48 此—①此の 49 ①読点あり。 50 優勢な—①優勢なる 51 此—①此の
52 ①読点あり。 53 ①読点あり。 54 ①読点あり。 55 思ふ—①思う
56 ①読点あり。 57 そう—①さう 58 其—①其の 59 ①句点が読点になっている。
60 時代に—①時代に 61 其—①其の 62 そう—①さう 63 実の—①眞の 64 ①読点あり。
65 ①読点あり。 66 ソンナ—①そんな 67 ドーデモ—①どうしても
68 構はない—①構はない 69 ①読点あり。 70 ①読点あり。 71 住はない—①住まない
72 其—①其の 73 こと—①事 74 構ふ—①構う 75 居れぬ—①居られぬ
76 ①読点あり。 77 其—①其の 78 ①読点あり。 79 其—①其の 80 所が—①処が
81 六ヶ敷—①六ヶ敷く 82 ①読点あり。 83 ①読点あり。 84 ①ルビなし。
85 明—①明らか 86 其—①其の 87 ①読点あり。

ての議論が色々と生し⁸⁸来る様になる。現時日本の状態が丁度此処である。道徳の実行を進めんとする希望よりして、今日は倫理の学説が盛に論究されつつある。動機が善なれば⁸⁹其⁹⁰結果の行為も従つて善であるとか、動機の如何にかかはらず⁹¹行為が悪なれば⁹²其は悪であるとか、⁹³議論としては面白い、研究の為には趣味が深い。けれども⁹⁴畢竟議論研究である。道徳の実行と云ふことになる⁹⁵議論や研究はどうても⁹⁶よい。人々各自に完全に善と思ふことを行ひ、悪と思ふことを作⁹⁷さなければよい。其⁹⁸完全に善と思ふことを行ひ、悪と思ふことを作⁹⁹さぬと云ふことが、六かしいのである。議論上や研究上の六かしいのとは丸で別のこと¹⁰⁰である。若し六かしい¹⁰¹議論や研究が終結せねば¹⁰²実行には及べないと云ふ次第なれば、今日の如きは¹⁰³まだ中々実行にかかれる時ではない。然るに道徳の実行は¹⁰⁴そう云ふ次第のことではない。既に昔より始められて居る。今之を始めても¹⁰⁵少しも差支はない。否¹⁰⁶今始めなければ¹⁰⁷何時始める¹⁰⁸べきであるか。恐くば¹⁰⁹其¹¹⁰時はなからう。であるから¹¹¹道徳の実行は議論や研究にかかはりて居るべきことではない、¹¹²丸で別のことである。

実行の困難から¹¹³一度議論や研究の途に入りたる所¹¹⁴が、其処にも色々の困難がありて¹¹⁵容易に解決の出来ないことが明¹¹⁶になると、実行の方面には非常なる刺激を感じて¹¹⁷、今度は一層盛なる熱心を以て¹¹⁸実行専修の道に立還ることになる。此処には一つの興味のある所で、学問の素養や知識の欲望の盛なる人は、議論や研究に年月を費す間が長く、中には何十年と云ふ程¹¹⁹此¹²⁰事にかかる人がある。然るに学問の素養も少く¹²¹、知識の欲望も薄き者には、容易に議論や研究の迷路を脱却する者が多い。頭から議論や研究をしない者も沢山ある。兎も角¹²²何れも終には¹²³実行のことのみに心掛る¹²⁴様になり

88 生し一〇生じ 89 〇読点あり。 90 其一〇其の 91 〇読点あり。 92 〇読点あり。 93 とか、一〇とかいふことは 94 けれども一〇けれども 95 〇読点あり。 96 どうても一〇どうても 97 作一〇為 98 其一〇其の 99 作一〇為 100 こと一〇事 101 六かしい一〇六々敷い 102 〇読点あり。 103 〇読点あり。 104 〇読点あり。 105 〇読点あり。 106 〇読点あり。 107 〇読点あり。 108 始める一〇始む 109 恐くば一〇恐らくは 110 其一〇其の 111 〇読点あり。 112 〇読点が句点になっている。 113 〇読点あり。 114 所一〇処 115 〇読点あり。 116 明一〇明らか 117 感じて一〇感じて 118 〇読点あり。 119 〇読点あり。 120 此一〇此の 121 少く一〇なく 122 〇読点あり。 123 終には一〇終いには 124 掛る一〇掛ける

て、其¹²⁵実行に就て困難を感じる¹²⁶様になる。他力真宗の真俗二諦の教を聞きて¹²⁷其¹²⁸俗諦の教が容易く行ひ得らる¹²⁹もの¹³⁰の様に思ふ¹³¹て居る人達は、また¹³²此処迄来らずして、倫理や道德の議論研究をして居る人達と同格の人達である。

善を行ひ悪を作¹³³さぬことが¹³⁴容易に出来ることではないと云ふに就て、一言してよいことがある。此ことは何れの教にもあらはれてある、¹³⁵根本義とも¹³⁶云ふべきことであるが、更に一方より見れば、此ことは教と云ふよりも¹³⁷寧ろ天然自然の欲望であるとも云へる。我等は教を待たずとも善が行ひたひ¹³⁸、悪は¹³⁹作¹⁴⁰したくないと云ふ欲望が¹⁴¹天然自然に具りてある。其であるから、若し此¹⁴²事が容易に出来ることなれば¹⁴³棄てて置いて我等は道德を実行する筈である。然るに中々そう¹⁴⁴云ふ都合には往かず¹⁴⁵して、非常なる注意を以て教へても¹⁴⁶尚充分に実行し得る者のなきは¹⁴⁷外ではない。道德の実行は¹⁴⁸所謂三歳の童子も之を言ひ得るも¹⁴⁹八十の老翁も¹⁵⁰之を行ふ能はざることであるからである。然るに¹⁵¹真宗の俗諦の実行が容易に出来ることの様に思ふものあれば¹⁵²其は心得違ひと云はねばならぬ。

或人は云ふ、真宗の俗諦は¹⁵³通常の倫理道德とは¹⁵⁴其¹⁵⁵趣を異にするものである。通常の倫理道德は¹⁵⁶宗教と離れたる倫理道德であるから¹⁵⁷実行が出来ないが、真宗の俗諦は真諦より流れ出づる¹⁵⁸所の道德であるから¹⁵⁹真諦の信心が確に¹⁶⁰決得せられてある上は自然必然に実行せらるることであると。此は一理あることの様なれども、尚少しく注意を要する点がある。其は自然必然に行はるる事と、有意作用によりて行はるる事との区別である。自然必然に行はるることには、教の必要はない。教の必要のあるの¹⁶¹は、其¹⁶²教によりて以て¹⁶³我等の有意作用を啓発せんが為である。故に真宗の俗諦の実行は¹⁶⁴

125 其—①其の 126 感する—①感ずる 127 ①読点あり。 128 其—①其の
129 得らる—①得らるる 130 もの—①者 131 思ふ—①思う 132 また—①まだ
133 作—①為 134 ①読点あり。 135 ①読点なし。 136 ①<も>なし。 137
①読点あり。 138 行ひたひ—①行ひたい 139 悪は—①悪を 140 作—①為 141
①読点あり。 142 此—①此の 143 ①読点あり。 144 そう—①さう 145 往かず—①行かず
146 ①読点あり。 147 ①読点あり。 148 ①読点あり。 149 ①読点あり。
150 ①読点あり。 151 ①読点あり。 152 ①読点あり。 153 ①読点あり。
154 ①読点あり。 155 其—①其の 156 ①読点あり。 157 ①読点あり。 158
出づる—①出る 159 ①読点あり。 160 確か—①確かに 161 ①<の>なし。
162 其—①其の 163 ①読点あり。 164 ①読点あり。

自然必然に出来ることであれば¹⁶⁵、真諦の教さへあれば¹⁶⁶別に俗諦の教はいらない¹⁶⁷筈である。然るに殆んど¹⁶⁸真諦と肩を並べたるか如くに¹⁶⁹俗諦が教へらるる以上は、俗諦の実行は¹⁷⁰真諦の信心より自然必然に現はれ来るものではないことは明白である。真諦の信心により自然必然に獲る所は¹⁷¹所謂現生十種の益である。此は自然必然に獲らるるものであるから、其に就てあーせよ^{172, 173}こーせよ¹⁷⁴とか、あーせねば¹⁷⁵ならぬ、こーせねば¹⁷⁶ならぬとか云ふ教はない。冥衆の護持を願へとか、至徳の具足せんことを祈れとか云ふ様な教は一つもない。願はなくとも、祈らなくとも、自然必然に冥衆護持の益も獲られ¹⁷⁷至徳具足の益も獲らるるからである。十種の益の中には¹⁷⁸転悪成善の益とか、知恩報徳の益とか云ふが如きは、善悪や恩徳に関したるものである。なれども此は冥衆護持の益や¹⁷⁹至徳具足の益と同しく¹⁸⁰自然必然に獲らるる益でありて、此が為にあーせよ¹⁸¹、こーせよ¹⁸²と云ふ様な教はない。然るに真宗¹⁸³俗諦は¹⁸⁴真諦と並んで厳然たる教として説かるるもの¹⁸⁵であるから、決して信心より自然必然に¹⁸⁶現れ来る所のことを示したのでなくして、我等の有意作用を啓発せんが為に¹⁸⁷存する所のものであることを知るべきである。そーして¹⁸⁸見れば¹⁸⁹真宗俗諦の実行の困難は、一般普通¹⁹⁰の倫理道德の実行の困難と¹⁹¹別段変りはないと云ふ¹⁹²て差支はない。即ち換言すれば^{193, 194}真宗の俗諦の完全なる実行は¹⁹⁵容易に出来ることではないと落居すべきである。

真宗の俗諦にしろ、一般普通の倫理道德にしろ、其¹⁹⁶完全なる実行は六かしくとも、其¹⁹⁷幾分かは実行の出来ないものではない。而して漸次修行すれば¹⁹⁸段々完全に近く¹⁹⁹ことが出来る。故にたとへ²⁰⁰困難でも、其²⁰¹教は最も大切なものである。亦其²⁰²実行も²⁰³最も急要であると云ふが²⁰⁴屢々提出せ

165 あれば—①あれば 166 ①読点あり。 167 いらぬ—①いらぬ 168 殆んど—①殆ど 169 ①読点あり。 170 ①読点あり。 171 ①読点あり。 172 あーせよ—①あーせよ 173 ①読点あり。 174 こーせよ—①かうせよ 175 あーせねば—①あーせねば 176 こーせねば—①かうせねば 177 ①読点あり。 178 ①読点あり。 179 ①読点あり。 180 同じく—①同じく 181 あーせよ—①あーせよ 182 こーせよ—①かうせよ 183 真宗—①真宗の 184 ①読点あり。 185 もの—①者 186 ①読点あり。 187 ①読点あり。 188 そうして—①さうして 189 ①読点あり。 190 一般普通—①普通一般 191 ①読点あり。 192 云ふ—①云う 193 すれば—①すれば 194 ①読点あり。 195 ①読点あり。 196 其—①其の 197 其—①其の 198 ①読点あり。 199 近く—①近づく 200 たとへ—①仮令 201 其—①其の 202 其—①其の 203 実行も—①実行は 204 ①読点あり。

らるる議論である。此も一理あることではあるが。²⁰⁵精密に云ふ時²⁰⁶には、
 此処で真宗の俗諦と²⁰⁷一般の道德との区別をせなければならぬ。一般の道德
 では、他に我等が進歩すべき道はないので、何んでも角でも道德的修行の一点
 張²⁰⁸で進まなければならぬ。²⁰⁹からして²¹⁰出来る出来ぬにかかはらず²¹¹一歩
 づつでも実行せねばならぬと²¹²無理にでも決着することである。そこで決着
 はよけれども²¹³実際に至るときは²¹⁴段々と不安に陥りて、終には宗教に入る
 か、或は人生の前途に絶望してしまう²¹⁵様になる。然るに真宗の俗諦は、元
 来真諦と並び立て²¹⁶居るのであるから。²¹⁷前途の事は皆悉く真諦の方で成弁
 してある。故に最早俗諦の方に於て²¹⁸自身の進歩を求めねばならぬと云ふ必
 要は少しもない。特に其²¹⁹実行に就ては²²⁰前に述べたるが如き困難がありて、
 いくら勉めても²²¹決して²²²立派なことが出来る訳もなく、且つ其²²³実行の出
 来不出来は²²⁴人々の業報²²⁵或は天賦の模様²²⁶によることでありて、業報或は
 天賦の劣等なるものは²²⁷如何に努力するも到底勝れたることは出来ない次第
 である。故に真宗の俗諦の趣意は²²⁸其²²⁹実行の方面に於て成効²³⁰を求むるに
 あらずして、其²³¹他の点に於て効力があるのである。兎も角²³²真宗の俗諦は
 其²³³実行が出来て²³⁴我等が立派な行ひをする様になるのを目的とするのでは
 ないのである。従て²³⁵立派な行ひを目的とする一般普通の道德と、真宗の俗
 諦とは²³⁶大に²³⁷其²³⁸趣を異にするものである。言葉を換へて云へば²³⁹立派な
 行ひをしようが²⁴⁰劣悪なる行ひをしようか²⁴¹、其はどちらでも構はない²⁴²。
 真宗の俗諦の教は²⁴³そんな所を目的とするものではない。

然らば真宗の俗諦の目的は如何なる点にあるか。其²⁴⁴実行の出来難いこ
 と²⁴⁵を感知せしむるのが目的である。此は既に真諦の信心を得たる者に対す
 ると、未だ信心を得ざる²⁴⁶者に対するとの別はあれども、何れの場合にても²⁴⁷

205 ㊦句点が読点になっている。 206 時—㊦とき 207 ㊦読点あり。 208 一点張
 —㊦一点張り 209 ㊦句点なし。 210 ㊦読点あり。 211 ㊦読点あり。 212 ㊦読
 点あり。 213 ㊦読点あり。 214 ㊦読点あり。 215 しまう—㊦しまふ 216 立て
 —㊦立つて 217 ㊦句点が読点になっている。 218 ㊦読点あり。 219 其—㊦其の
 220 ㊦読点あり。 221 ㊦読点あり。 222 ㊦読点あり。 223 其—㊦其の 224
 ㊦読点あり。 225 ㊦読点あり。 226 模様—㊦模様 227 ㊦読点あり。 228 ㊦読
 点あり。 229 其—㊦其の 230 成効—㊦成功 231 其—㊦其の 232 ㊦読点あり。
 233 其—㊦其の 234 ㊦読点あり。 235 従て—㊦従つて 236 ㊦読点あり。
 237 大に—㊦大いに 238 其—㊦其の 239 ㊦読点あり。 240 ㊦読点あり。
 241 しようか—㊦しようが 242 構はない—㊦構はない 243 ㊦読点あり。 244 其
 —㊦其の 245 こと—㊦事 246 得ざる—㊦得ざる 247 ㊦読点あり。

道徳的実行の出来難いことを²⁴⁸感知せしむる為と云ふ点に於ては同一である。其に如何なる妙趣があるかと云はば、先づ未だ信心を得ざる²⁴⁹もの²⁵⁰は²⁵¹道徳的実行の出来難きこと²⁵²を感知するよりして宗教に入り、信心を得る道に進む様になる。此は一寸見れば^{253, 254}何でもないことの様なれども、中々そ—²⁵⁵ではない。他力の信仰に入る根本的障壁²⁵⁶は、自力の修行が出来得ることの様に思ふことである。其²⁵⁷自力の修行と云ふ事は色々あれとも²⁵⁸、其²⁵⁹最²⁶⁰普通の事は²⁶¹我等の倫理道徳の行為である。此²⁶²道徳行為が立派に出来るものであると思ふ²⁶³て居る間は、²⁶⁴到底他力の宗教には入ることが出来ぬ。然るに倫理道徳に就て²⁶⁵真面目に実行を求むるときは、其²⁶⁶結果は²⁶⁷終に倫理道徳の思ふ通りに行ひ得らるるものでないことを感知すに²⁶⁸様になるのが、実に宗教に入る為の必須条件である。此²⁶⁹場合には²⁷⁰畢竟自力の迷心を降伏するが主眼であるから、真宗俗諦の教でも、世間普通の倫理道徳の教でも、或は又²⁷¹五戒十善でも、諸善万行でも、何でも差支はない。²⁷²が²⁷³真宗俗諦の教は²⁷⁴直に²⁷⁵真諦門を開示する組織になりてあるから、最も好都合のものである。次に信心獲得以後の者には²⁷⁶如何なることになるかと云ふに、我等は他力の信心により、大安心を得たれども、尚習慣性となりて居る自力の迷心は²⁷⁷断へず²⁷⁸起り来りて止まないことである。そこで²⁷⁹俗諦の教を聞かざる時は、丁度其²⁸⁰迷心に適當したる教であるから、直に²⁸¹之を実行せんとすることとなる。然るに実行に掛りて見ると、到底其²⁸²出来難いことを感知するが為に、転して²⁸³他力の信仰を喜び、所謂至心²⁸⁴信楽已れを忘れて²⁸⁵無行不成の願海に帰す²⁸⁶と云ふ態度に立ち帰ることである。即ち此²⁸⁷場合に於ては、俗諦の教は其²⁸⁸実行の出来難きが為に²⁸⁹愈²⁹⁰無限大悲に対する感謝の念を深

248 ㊦読点あり。 249 得ざる—㊦得ざる 250 もの—㊦者 251 ㊦読点あり。
 252 こと—㊦事 253 見れば—㊦見れば 254 ㊦読点あり。 255 そ—㊦さう
 256 障壁—㊦障壁 257 其—㊦其の 258 あれとも—㊦あれども 259 其—㊦其の
 260 最—㊦最も 261 ㊦読点あり。 262 此—㊦此の 263 思ふ—㊦思う 264
 ㊦読点あり。 265 ㊦読点あり。 266 其—㊦其の 267 ㊦読点あり。 268 感知す
 に—㊦感知する 269 此—㊦此の 270 ㊦読点あり。 271 ㊦読点あり。 272 ㊦句
 点なし。 273 ㊦読点あり。 274 ㊦読点あり。 275 直に—㊦直ちに 276 ㊦読点
 あり。 277 ㊦読点あり。 278 断へず—㊦断えず 279 ㊦読点あり。 280 其—㊦
 其の 281 直に—㊦直ちに 282 其—㊦其の 283 転して—㊦転じて 284 至心
 —㊦「至心 285 ㊦読点あり。 286 帰す—㊦帰す」 287 此—㊦此の 288 其—㊦
 其の 289 ㊦読点あり。 290 愈—㊦愈々

からしむるが目的である。然るに以上二つの場合の中、第一の場合は、寧ろ随宜転用と云ふ様な都合で、真宗には真俗二諦とか。²⁹¹二諦相依と²⁹²云ふことがあると聞き、此は国家社会を忘れざる宗教であると云ふ様な点からして、未だ真諦の信心獲得は²⁹³出来ずとも、兎も角倫理道德として真宗の俗諦の実行を勉むる様な場合に、其が終に真諦の信心を獲得せしむる案内となるのである。しかし本統の二諦相依の真味は²⁹⁴第二の場合にあるのである。真諦の信心あるが為に、俗諦の実行の出来ざるに驚かず、俗諦の実行の出来ざるが為に²⁹⁵弥²⁹⁶真諦の信心の有難味を感じる所、実に相依相資の妙趣が²⁹⁷ありありと感知せらるることである²⁹⁸。

俗諦の効用は²⁹⁹前段に述べたる第二の場合が本趣であるが、其³⁰⁰趣味の進達に就き³⁰¹更に一言すべきことがある。其は此³⁰²俗諦の効用が³⁰³始めの間は実行の困難を感じる所に於て発現すること³⁰⁴であるが、其が段々進達する時は実行難を感じるに至るを待たずして³⁰⁵其が発現する様になり、終には俗諦とか道德とか云³⁰⁶言葉³⁰⁷を聞けば、直に³⁰⁸二諦相依の真趣を味ひ得るようになる。之を言ひ換へて見れば、俗諦とか道德とか云ふことは³⁰⁹我には実行が出来ぬが、其³¹⁰出来ぬのが当然である。其³¹¹実行の出来ぬ様な我を³¹²無限の大悲は摂取して捨てたまはぬ³¹³。実に感謝の外はない³¹⁴有難いことであると喜ぶことである。この思念が初めは³¹⁵急には起らなかつたのが、終には俗諦とか道德とか云ふ言葉を聞く時³¹⁶直に³¹⁷現起する様になる。此³¹⁸思念の反証として現はるることがある。³¹⁹其はこう³²⁰である。真宗の俗諦の教に就て³²¹全く普通の道德を見る者の如く、其³²²実行が出来得ることと確執して、「守る」³²³とか、「守らぬ」³²⁴とか、「済む」³²⁵とか、「済まぬ」³²⁶とか云ふことに煩悶する者を見る時は、一方には其³²⁷者の迷執を憐むと共に、又一方には自身の安住

291 ㊦句点が読点になっている。 292 と一㊦とか 293 信心獲得は一㊦信心は獲得
294 ㊦読点あり。 295 ㊦読点あり。 296 弥一㊦弥々 297 ㊦読点あり。 298
である一㊦でる 299 ㊦読点あり。 300 其一㊦其の 301 ㊦読点あり。 302 此
一㊦此の 303 ㊦読点あり。 304 こと一㊦事 305 ㊦読点あり。 306 云一㊦云ふ
307 言葉一㊦語 308 直に一㊦直ちに 309 ㊦読点あり。 310 其一㊦其の 311
其一㊦其の 312 ㊦読点あり。 313 たまはぬ一㊦給はぬ 314 ㊦読点あり。 315
初めは一㊦初は 316 ㊦読点あり。 317 直に一㊦直ちに 318 此一㊦此の 319
㊦句点が読点になっている。 320 こう一㊦かつ 321 ㊦読点あり。 322 其一㊦其の
323 「守る」一㊦守る 324 「守らぬ」一㊦守らぬ 325 「済む」一㊦済む 326 「済まぬ」
一㊦済まぬ 327 其一㊦其の

を喜ぶことである。此の「守る」³²⁸、「守らぬ」³²⁹、「済む」³³⁰、「済まぬ」³³¹と云ふ、所謂義務責任と云はるることは³³²実に人生に於ける煩悶の大なる部分を占むることで、其³³³勢力は頗る雄大なるものである。他力真宗の俗諦の教は³³⁴よしや「斯くせよ」^{335, 336}「斯くすな」³³⁷と³³⁸命令的態度に顕はさるることあるも、大体其³³⁹根本に於て「斯くせねばならぬ」^{340, 341}「斯くしてはならぬ」³⁴²と云ふ外圧力を認定せざるが故に、たとへ多少の煩悶がある場合にてても、普通の道德妄想の煩悶の如きことはない。換言すれば³⁴³普通の道德妄想の場合にては「斯くせよ」^{344, 345}「斯くすな」³⁴⁶と命令せらるる時、之に「斯くせねばならぬ」^{347, 348}「斯くしてはならぬ」³⁴⁹と云ふ妄想が加はるるが為に、神か仏が「是非此事をせよ」^{350, 351}「決して此事をしてはならぬ」^{352, 353}と厳然たる命令を下さるるが如く思ひ、従つて「此事をせねば助らぬ」^{354, 355}「此事をしては助らぬ」³⁵⁶と云ふ塩梅に、道德行為の実行の出来不出来によりて³⁵⁷救済の大事が成ると成らぬとの別を生ずる³⁵⁸様に思ふからして³⁵⁹其³⁶⁰出来不出来に関して³⁶¹非常なる煩悶があるは³⁶²当然の次第である。然るに他力真宗の俗諦の実行は、出来やうが出来まいが、救済の大事には毫も関係なきものであるから、よしや其³⁶³実行の出来不出来に関して³⁶⁴多少の煩悶があつても、道德妄想より起る煩悶に比すべきものは少しもない。³⁶⁵のみならず³⁶⁶其³⁶⁷煩悶の性質が丸で異なりて居る。一方は鬼に責めらるる煩悶であるに対して、一方は仏の大悲に慚ぢ入るの煩悶である。一方は何処迄も容赦せぬと云ふ瞋怒の烈しきに恐怖するの³⁶⁸涙であるに対して、一方は何処迄も摂取すると云ふ慈愍の深きに感泣す

328 「守る」—㊦守る 329 「守らぬ」—㊦守らぬ 330 「済む」—㊦済む 331 「済まぬ」—㊦済まぬ 332 ㊦読点あり。 333 其—㊦其の 334 ㊦読点あり。 335 「斯くせよ」—㊦斯くせよ 336 ㊦読点あり。 337 「斯くすな」—㊦斯くすな 338 ㊦読点あり。 339 其—㊦其の 340 「斯くせねばならぬ」—㊦斯くせねばならぬ 341 ㊦読点あり。 342 「斯くしてはならぬ」—㊦斯くしてはならぬ 343 ㊦読点あり。 344 「斯くせよ」—㊦斯くせよ 345 ㊦読点あり。 346 「斯くすな」—㊦斯くすな 347 「斯くせねばならぬ」—㊦斯くせねばならぬ 348 ㊦読点あり。 349 「斯くしてはならぬ」—㊦斯くしてはならぬ 350 「是非此事をせよ」—㊦是非此の事をせよ 351 ㊦読点あり。 352 「決して此事はしてはならぬ」—㊦決して此の事はしてはならぬ 353 ㊦読点あり。 354 「此事をせねば助らぬ」—㊦此の事をせねば助らぬ 355 ㊦読点あり。 356 「此事をしては助らぬ」—㊦此の事をしては助からぬ 357 ㊦読点あり。 358 生する—㊦生ずる 359 ㊦読点あり。 360 其—㊦其の 361 ㊦読点あり。 362 ㊦読点あり。 363 其—㊦其の 364 ㊦読点あり。 365 ㊦句点なし。 366 ㊦読点あり。 367 其—㊦其の 368 ㊦＜の＞なし。

るの³⁶⁹涙である。

此の如き次第であるからして、真宗の俗諦の教は³⁷⁰真諦の信心の外に、別に積極的に人道の規定を与ふるものではない。若し積極的に人道の規定を与ふるものなれば³⁷¹、其³⁷²綱領も確然一定してある筈である。然るに或は単に掟と云ひ、或はさつと³⁷³王法仁義と云ひ、或は又³⁷⁴仁義礼智信の五常と為す等、其³⁷⁵事柄が頗る漫然と示してある。更に其³⁷⁶根拠と云はるる五善五惡³⁷⁷とか、唯除五逆誹謗正法³⁷⁸とか云ふので見れば、亦少しく趣を異にすることである。勿論³⁷⁹強て³⁸⁰此等を会通せんとすれば³⁸¹皆同一の事を云ふたものであるとせられぬこともないが、寧ろそんな牽強附会をせない方がよい。何故かなれば、前に云ひたるが如く、真宗俗諦の教は³⁸²其³⁸³実行が出来ると云ふ方が主眼ではなくして³⁸⁴、其³⁸⁵実行の出来さる³⁸⁶ことを感知せしむるが主要であるから、其³⁸⁷事柄は決して具に之を列挙する必要もなければ、亦其³⁸⁸事柄を一定する必要もない。何でも構はぬ、善と云はるるものを行はんとして見るがよい。或は惡と云はるるものを作さざらんとして見るがよい。決して其³⁸⁹充分なる実行が出来るものでないことを開悟するに至ることである。此³⁹⁰開悟が即ち俗諦の教の要点であるのである。此³⁹¹要点が達せられ、此³⁹²開悟が得らるるのは³⁹³是れ³⁹⁴やがて真諦の信心の喜ばるるのである。故に俗諦の教は³⁹⁵つまり真諦の信心を裏面より感知せしむるより外はないのである。即ち真諦の積極的に対して俗諦は消極的に趣味を有することである。故に此³⁹⁶俗諦の教を以て積極的に人道を守らしむるものであるとか、国家社会を益するものであるとか云ふ様に思ふは大なる見当違ひである。勿論王法を本とし、仁義を先として教らるれば³⁹⁷幾何か其³⁹⁹実行を為すこと⁴⁰⁰もあれとも⁴⁰¹、其は寧ろ附けたりの事で、其よりは其⁴⁰²実行の出来なくなつた所⁴⁰³以上の教の主要であるので

369 ㊦<の>なし。 370 ㊦読点あり。 371 なれば—㊦なれば 372 其—㊦其の
373 さつと—㊦ざつと 374 ㊦読点あり。 375 其—㊦其の 376 其—㊦其の
377 五善五惡—㊦「五善五惡」 378 唯除五逆誹謗正法—㊦「唯除五逆誹謗正法」 379 ㊦読点あり。 380 強て—㊦強ひて 381 ㊦読点あり。 382 ㊦読点あり。 383 其—㊦其の
384 なくして—㊦なくて 385 其—㊦其の 386 出来さる—㊦出来ざる
387 其—㊦其の 388 其—㊦其の 389 其—㊦其の 390 此—㊦此の 391 此—㊦此の
392 此—㊦此の 393 ㊦読点あり。 394 ㊦読点あり。 395 ㊦読点あり。
396 此—㊦此の 397 教らるれば—㊦教へらるれば 398 ㊦読点あり。 399 其—㊦其の
400 こと—㊦事 401 あれとも—㊦あらうけれども 402 其—㊦其の
403 所—㊦処が、

ある。然るに幾何かの効果あればとて⁴⁰⁴其⁴⁰⁵主要の所でなくして、其⁴⁰⁶附け
たりの所に就て尊重せらるるのは⁴⁰⁷一向目的にかなはない次第である。宗教
的部分が本趣意であるのに⁴⁰⁸其⁴⁰⁹附属たる道德的部分が珍重せらるるので
あるから変な訳合である。

大体⁴¹⁰俗諦と道德とか、俗諦と国家とか云ふ様なことを、引き合はせて云
ふ際には、常に其⁴¹¹各⁴¹²の資格を明⁴¹³にして置かなければならぬ。先づ俗諦
と道德とに就て云ふ事は⁴¹⁴俗諦とは何事であるかと云ふことを明⁴¹⁵に知らね
ばならぬ。そう⁴¹⁶云ふ⁴¹⁷て見れば⁴¹⁸、直に⁴¹⁹気が附くことではあるが、俗諦
は真諦と相並で⁴²⁰他力真宗の教義である。即ち道德の教ではなくして宗教の
教である、⁴²¹人道の教ではなくして仏道の教である。そう⁴²²して見れば俗諦は
宗教家の説くべき所にして⁴²³宗教的效果を目的とすべきは言ふ迄もないこと
である。然るに道德は道德にして宗教ではない。⁴²⁴人道の教にして仏道の教で
はない。故に此は道德家の説くべき所にして、道德的效果を目的とすべきであ
る。政治家が商売の事を云はぬこともないけれども⁴²⁵政治家は商人ではない。
商人が穀類の事を行はぬこともないけれども⁴²⁶商人は農夫ではない。宗教と
道德とを区別して居る以上は⁴²⁷其⁴²⁸領分を乱す必要はない。若し宗教と道德
との区別を認めずして⁴²⁹宗教即道德、道德即宗教と云ふすはりを取るなれ
ば⁴³⁰初め⁴³¹より俗諦と道德との関係などと云ふ論は無用である。又⁴³²其⁴³³時
は真諦より俗諦を離して⁴³⁴道德を云々すべきでない。真諦俗諦⁴³⁵共に道德の
教となることである。扱次に⁴³⁶俗諦と国家社会との関係に就ても、大体俗諦
と云ふことは宗教の教である以上は、其⁴³⁷国家社会に貢献する所も、亦宗教
的功績を貢献すべきことは言ふ⁴³⁸迄もない筈である。然れば既に真諦の教を
提唱して⁴³⁹宗教的功績を貢献しつつある以上は、其に⁴⁴⁰俗諦を説かぬから国家
社会に裨益がないと責むるは異門の鑰である。若し真諦と俗諦とが別々のこ

404 ㊦読点あり。 405 其—㊦其の 406 其—㊦其の 407 ㊦読点あり。 408 ㊦読点あり。 409 其—㊦其の 410 ㊦読点あり。 411 其—㊦其の 412 各—㊦各々 413 明—㊦明らか 414 ㊦読点あり。 415 明—㊦明らか 416 そう—㊦さう 417 云ふ—㊦云う 418 見れば—㊦見れば 419 直に—㊦直ちに 420 相並で—㊦相並んで 421 ㊦読点が句点になっている。 422 そう—㊦さう 423 ㊦読点あり。 424 ㊦句点が読点になっている。 425 ㊦読点あり。 426 ㊦読点あり。 427 ㊦読点あり。 428 其—㊦其の 429 ㊦読点あり。 430 ㊦読点あり。 431 初め—㊦初 432 ㊦読点あり。 433 其—㊦其の 434 ㊦読点あり。 435 ㊦読点あり。 436 ㊦読点あり。 437 其—㊦其の 438 言ふ—㊦云ふ 439 ㊦読点あり。 440 其に—㊦共に

とを教ふるものなれば⁴⁴¹甲を説た⁴⁴²が⁴⁴³まだ乙が説かれぬから物足らぬと云ふ⁴⁴⁴てもよからうが、真諦と俗諦とは只表よりすると裏よりするとの違ひのみにて、全く同一のことを教ふるのである以上は、甲のみで物足らぬと云ふこともない筈である。其は兎に角⁴⁴⁵よしや俗諦を説きても⁴⁴⁶其⁴⁴⁷国家社会に貢献すべき所は其⁴⁴⁸宗教的効果であるべきことは勿論でありて⁴⁴⁹、此は真諦の教を説く時は⁴⁵⁰其によりて既に為しつつあることである。

宗教と道德とは区別がありて、宗教者は宗教を説き、道德家は道德を説くはよいが、宗教を説くが為に道德を破壊するは⁴⁵¹不都合であると云ふ議論がある。此は一寸困難な問題の様ではあるが。⁴⁵²しかし何とも致し方はない。道德と云ふものが⁴⁵³さ程⁴⁵⁴脆き⁴⁵⁵ものなれば⁴⁵⁶壊^{こは}れるも⁴⁵⁷よいかも知れぬ。されど宗教者は矢張り宗教を説くのが本分である。けれども⁴⁵⁸宗教者の本分を尽すのは⁴⁵⁹宗教的効果の為である。決して道德を破壊しようとするの⁴⁶⁰ではない。其が為に道德が破壊さるれば⁴⁶¹其は道德が自ら壊れるのである。しかしながら此の如き漫然たる議論は⁴⁶²果して実際に適當するの⁴⁶³であるかどうか。宗教者は如何なることを説くか。人を殺すと⁴⁶⁴殺さぬも択む⁴⁶⁵所はない、物を盗むとも盗まぬとも其は関する所でない、姦淫したきものをして姦淫せしめよ等と云ふ。是れ其⁴⁶⁶宗教的見地よりして云ふ所。無限の大悲は殺盗姦淫等の有無によりて⁴⁶⁷其⁴⁶⁸救済を異にすることなきことを説くに外ならぬことである。道德家は之を如何に聞くか。是れ道德を破壊するものなり、之れ⁴⁶⁹人道を蠱毒するものなりとするか。若し此の如く直に⁴⁷⁰断言するもの⁴⁷¹あれば、是れ少しく大早計に陥りたる者である。若し宗教と道德との区別を明知するもの⁴⁷²なれば、即ち云ふべきである⁴⁷³人を殺し⁴⁷⁴物を盗み⁴⁷⁵姦淫妄語するものをも咎めずと云ふは、是れ寔に宗教としてそう⁴⁷⁶なくてはならぬことなら

441 ㊦読点あり。 442 説た—㊦説いた 443 ㊦読点あり。 444 云ふ—㊦云う
 445 ㊦読点あり。 446 ㊦読点あり。 447 其—㊦其の 448 其—㊦其の 449 ありて—㊦あつて 450 ㊦読点あり。 451 ㊦読点あり。 452 ㊦句点が読点になっている。
 453 ㊦読点あり。 454 さ程—㊦左程 455 脆き—㊦弱き 456 ㊦ルビなし。
 457 ㊦読点あり。 458 ㊦＜けれども＞なし。 459 ㊦読点あり。 460 の—㊦ため
 461 ㊦読点あり。 462 ㊦読点あり。 463 の—㊦者 464 と—㊦も 465 択む—㊦選む
 466 其—㊦其の 467 ㊦読点あり。 468 其—㊦其の 469 之れ—㊦是れ
 470 直に—㊦直ちに 471 もの—㊦ものが 472 もの—㊦者 473 ㊦読点あり。
 474 ㊦読点あり。 475 ㊦読点あり。 476 そう—㊦さう

ん⁴⁷⁷然れども人道道德⁴⁷⁸上に於ては⁴⁷⁹殺盜は罪惡なり、姦淫妄語は許すべからざることである、之を犯すものは皆之れ⁴⁸⁰人道の罪人である。⁴⁸¹⁴⁸²道德界の墮落漢であると、⁴⁸³此の如くして宗教者は宗教の見地よりして法を説き⁴⁸⁴道德家は道德の見地よりして説を為す。二者別立して毫も牴触⁴⁸⁵する所なきことである。唯其⁴⁸⁶人を殺し⁴⁸⁷物を盗み⁴⁸⁸姦淫し⁴⁸⁹妄語したる者、道德を先にし宗教を後にするものなれば、其⁴⁹⁰罪過を改悛して道德の門に入るべく、宗教を先にして道德を後にする者なれば、其⁴⁹¹僣に走りて宗教の門に入るべく、若し宗教と道德とを并⁴⁹²せて要とする者なれば、其⁴⁹³罪過を改悛して⁴⁹⁴同時に宗教と道德との二門に入るべく、若し宗教をも道德をも顧みざる者なれば⁴⁹⁵其⁴⁹⁶僣にして罪惡の闇夜に彷徨するならん。殺盜等の罪惡を犯さざる場合も⁴⁹⁷之に準して⁴⁹⁸知ることが出来る。之を要するに⁴⁹⁹宗教の説が道德を害するとか、仏道を立つるが為に人道が破れるとか、只漫然たる議論のみでは誤解を免かれ難い。事は須らく精密を要すべきである。宗教と道德の區別が明か⁵⁰⁰でありて⁵⁰¹宗教者は宗教の分を守り、道德家は道德の分を守りて⁵⁰²各⁵⁰³其⁵⁰⁴能を尽せば⁵⁰⁵各⁵⁰⁶其⁵⁰⁷功績を国家社会に貢献することである。

以上⁵⁰⁸他力真宗の俗諦と、世の所謂倫理道德との交渉に就き⁵⁰⁹自分の領解の僣を⁵¹⁰筆に任せて一点書きの積りで⁵¹¹申⁵¹²述べたのである。病後の作⁵¹³粗漏を免れぬ段は⁵¹⁴陳謝して置きます。

477 ㊦読点あり。 478 道德—㊦道德の 479 ㊦読点あり。 480 之れ—㊦是れ
481 ㊦句点が読点になっている。 482 ㊦＜又＞あり。 483 ㊦読点が句点になっている。
484 ㊦読点あり。 485 牴触—㊦抵触 486 其—㊦其の 487 ㊦読点あり。 488
㊦読点あり。 489 ㊦読点あり。 490 其—㊦其の 491 其—㊦其の 492 并—㊦併
493 其—㊦其の 494 ㊦読点あり。 495 ㊦読点あり。 496 其—㊦其の 497 ㊦
読点あり。 498 準して—㊦準じて 499 ㊦読点あり。 500 明か—㊦明らか 501
㊦読点あり。 502 ㊦読点あり。 503 各—㊦各々 504 其—㊦其の 505 尽せば
—㊦尽せば 506 各—㊦各々 507 其—㊦其の 508 ㊦読点あり。 509 ㊦読点あり。
510 ㊦読点あり。 511 ㊦読点あり。 512 申—㊦申し 513 ㊦読点あり。
514 ㊦読点あり。

1

我信念² 清沢満之³

清沢満之先生、病床、自から筆を執て、『我信念』の一篇を草し、その後、数日を出でざるに病俄かに革まり、本月六日、午前一時、溘然、三河国大浜町西方寺に於て、浄土に還り給ひぬ。然らば、『我信念』の一篇は、こはこれ、先生の絶筆、先生が我等の爲めに、世に残したる最後の講話なり。ゆへに、之を本誌の巻頭にかかぐることとなしぬ。(編者識)⁴

私は常々信念とか如来とか云ふことを⁵口にして居ますが、其⁶私の信念とは如何なるものであるか⁷私の信する⁸如来とは如何なるものであるか、今⁹少しく之を¹⁰開陳しやうと思ひます。¹¹

私の信念とは、申す迄もなく、私が如来を信ずる心の有様を申すのであるが、其に就て、信する¹²と云ふことと¹³、如来と云ふ¹⁴ことと¹⁵、二つの事柄があります。¹⁶此の二つの事柄は¹⁷丸で別々のことの様にもありますが、私にありては、そう¹⁸ではなくして、二つの事柄か¹⁹全く一つのこととあります。²⁰私の信念とは、²¹どんな²²ことであるか、如来を信ずることである。²³私の云ふ所の如来とは、²⁴どんな²⁵ものであるか、私の信する²⁶所の本体である。²⁷分けて云へば、能信と所信との別があるとでも申しませうか、即ち、私の能信²⁸は信念でありて、私の所信²⁹は如来であると申して置ませう。³⁰或は、³¹之を信する機³²と³³信せらる³⁴法との区別であると申してもよろしい。³⁵然し³⁶、³⁷能所だの、機法だ

1 ⑩<我は此の如く如来を信ず>あり。 2 我信念—⑧我が信念 ⑨(我信念) 3 ⑧<清沢満之>なし。 4 ⑧⑩<清沢満之先生、病床、自から筆を執て、『我信念』の一篇を草し、その後、数日を出でざるに病俄かに革まり、本月六日、午前一時、溘然、三河国大浜町西方寺に於て、浄土に還り給ひぬ。然らば、『我信念』の一篇は、こはこれ、先生の絶筆、先生が我等の爲めに、世に残したる最後の講話なり。ゆへに、之を本誌の巻頭にかかぐることとなしぬ。(編者識)>なし。 5 ⑩読点あり。 6 其—⑧其の 7 ⑧⑩読点あり。 8 信する—⑧信ずる 9 今—⑩之を 10 ⑩<之を>なし。 11 しやうと思ひます。—⑩しませう、 12 信する—⑧信ずる 13 信すると云ふこと—⑩信すると云ふこと 14 云ふ—⑧いふ 15 如来と云ふことと—⑩如来と云ふことと 16 ⑩句点が読点になっている。 17 ⑧読点あり。 18 そう—⑧さう ⑩ソー 19 か—⑧⑩が 20 ⑩句点が読点になっている。 21 ⑧読点なし。 22 どんな—⑩ドンナ 23 ⑩句点が読点になっている。 24 ⑧読点なし。 25 どんな—⑩ドンナ 26 信する—⑧信ずる 27 ⑩句点が読点になっている。 28 能信—⑩能信 29 所信—⑩所信 30 ⑩句点が読点になっている。 31 ⑧読点なし。 32 信する機—⑧信ずる機 ⑩信する機 33 ⑧読点あり。 34 信せらるる法—⑧信ぜらるる法 ⑩信せらるる法 35 ⑩句点が読点になっている。 36 然し—⑧シカシ 37 ⑧読点なし。

の、³⁸と云ふ様な名目を担き³⁹出すと、却て分ることが、⁴⁰分らなくなる恐れがあるから、そんな⁴¹ことは、⁴²一切省いて⁴³置きます。⁴⁴

私が信ずるとは、⁴⁵どんな⁴⁶ことか、なぜそんな⁴⁷ことをするのであるか、それにはどんな⁴⁸効能があるか、と云ふ様な色々の点があります。⁴⁹先づ其⁵⁰効能を第一に申せば、此⁵¹信ずると云ふことには、私の煩悶苦悩が払ひ去らるる効能がある。⁵²或は之を救済的効能と申しませうか。⁵³兎に角、私が種々の刺戟やら事情やらの為に、煩悶苦悩する場合に、此⁵⁴信念が心に現はれ来る時は、私は忽ちにして安楽と平穩とを得る様になる。⁵⁵其⁵⁶模様はどうか⁵⁷と云へば、私の信念が現はれ来る時は、其⁵⁸信念が心一ぱい⁵⁹になりて、他の妄想妄念の立ち場を失はしむることである。⁶⁰如何なる刺戟や事情が侵して来ても⁶¹信念が現在して居る時には、其⁶²刺激や事情が⁶³ちつとも⁶⁴煩悶苦悩を惹起することを得ないのである。⁶⁵私の如き感じ易きもの、特に病氣にて感情が過敏になりて居るものは、此⁶⁶信念と云ふものがなかつたならば、⁶⁷非常なる煩悶苦悩を免れぬことと⁶⁸思はれる。⁶⁹健康な人にてても⁷⁰苦悩の多き人には、是非此⁷¹信念が必要であると思ふ。⁷²私が宗教的にありがたい⁷³と申すことがあるが、其は信念の為に、此の如く現実に煩悶苦悩が払ひ去らるるのよろこび⁷⁴を申すのである。⁷⁵

第二⁷⁶。⁷⁷なぜ⁷⁸そんな⁷⁹如来を信ずると云ふ様なことをする⁸⁰のかと云ふに就ては、前に陳ぶるが如き効能があるから、と云ふ⁸¹ても⁸²よろしいが、尚ほ其より外の訳合があるのである。効⁸³能があるからと云ふのは、既に信じたる後の話である。ま⁸⁴だ信ぜざる前には、効能があるかなきかは、分らぬことで

38 ㊦読点なし。 39 担き—㊦㊧担ぎ 40 ㊦読点なし。 41 そんな—㊦ソナ
42 ㊦読点なし。 43 省いて—㊦省きて 44 ㊦句点が読点になっている。 45 ㊦読点なし。 46 どんな—㊦ドンナ 47 そんな—㊦ソナ 48 どんな—㊦ドンナ 49 ㊦句点が読点になっている。 50 其—㊦其の 51 此—㊦此の 52 ㊦句点が読点になっている。 53 ㊦句点が読点になっている。 54 此—㊦此の 55 ㊦句点が読点になっている。 56 其—㊦其の 57 どうか—㊦ドーか 58 其—㊦其の 59 一ぱい—㊦一パイ 60 ㊦句点が読点になっている。 61 ㊦㊦読点あり。 62 其—㊦其の 63 ㊦読点あり。 64 ちつとも—㊦チットモ 65 ㊦句点が読点になっている。 66 此—㊦此の 67 なかつたならば—㊦なかりたならば 68 ことと—㊦ことに 69 ㊦句点が読点になっている。 70 ㊦読点あり。 71 此—㊦此の 72 ㊦句点が読点になっている。 73 ありがたい—㊦ありがたい 74 よろこび—㊦よろこび 75 ㊦句点が読点になっている。 76 第二—㊦第二に 77 ㊦句点なし。一字空白あり。㊦句点が読点になっている。 78 ㊦読点あり。 79 そんな—㊦ソナ 80 ㊦読点あり。 81 云ふ—㊦云う 82 ㊦読点あり。 83 ㊦くる。効>不明。 84 ㊦ある。ま>不明。

ある。⁸⁵勿論⁸⁶人の効能があると云ふ言葉を聞いて⁸⁷信ぜられぬ訳でもないが。⁸⁸人の言葉を聞いた丈⁸⁹では、そう⁹⁰でもあらう位のことが多い。⁹¹真に効能があるか⁹²無いかと云ふことは、自分に実験したる上の話である。⁹³私が如来を信ずるのは、其⁹⁴効能によりて信ずるのみではない。⁹⁵其⁹⁶外に大なる根拠があることである。⁹⁷それはどうか⁹⁸と云ふに、私の⁹⁹如来を信する¹⁰⁰のは、私の智慧の¹⁰¹窮極であるのである、¹⁰²人生の事に真面目¹⁰³でなかりし間は、¹⁰⁴措いて¹⁰⁵云はず、少しく真面目になり来りてからは、どうも¹⁰⁶人生の意義に就て研究せずには居られないことになり、其¹⁰⁷研究が終に¹⁰⁸人生の意義は不可解であると云ふ所に到達して、茲に如来を信する¹⁰⁹と云ふことを惹起したのであります。¹¹⁰信念を得るには、強ち此の如き研究を要するわけでない¹¹¹からして¹¹²私が此の如き順序を経たのは、偶然のことではないかと云ふ様な疑もありそう¹¹³であるが。¹¹⁴私の信念は、¹¹⁵そう¹¹⁶ではなく、此¹¹⁷順序を経るのが必要であつたのであります¹¹⁸私の信念には、私が一切のことに就て、¹¹⁹私の自力の無功なることを信ずる、¹²⁰と云ふ点があります、¹²¹此¹²²自力の無功なることを信ずるには、私の智慧や思案の有り丈を尽して¹²³其¹²⁴頭の挙げやうのない様になる、¹²⁵と云ふことが必要である、¹²⁶此か¹²⁷甚だ骨の折れた仕事でありました。¹²⁸其¹²⁹窮極の達せらるる前にも、随分¹³⁰宗教的信念はこんな¹³¹ものである¹³²と云ふ様な決着は、¹³³時々出来ましたが、其が後から後から¹³⁴打ち壊はされてしまふたことが、¹³⁵幾度もありました¹³⁶、¹³⁷論理や研究で宗教を建立しとやう¹³⁸

85 ㊦句点が読点になっている。 86 ㊦読点あり。 87 ㊦読点あり。 88 ㊦㊦句点が読点になっている。 89 丈—㊦だけ 90 そう—㊦さう、㊦ソー 91 ㊦句点が読点になっている。 92 有るか—㊦あるか 93 ㊦句点が読点になっている。 94 其—㊦其の 95 ㊦㊦句点が読点になっている。 96 其—㊦其の 97 ㊦句点が読点になっている。 98 どうか—㊦ドーか 99 私の—㊦私が 100 信する—㊦信ずる 101 私の智慧の—㊦私のある、ま 102 ㊦読点が句点になっている。 103 真面目—㊦真面目 104 ㊦読点なし。 105 措いて—㊦措きて 106 どうも—㊦ドモ 107 其—㊦其の 108 終に—㊦遂に 109 信する—㊦信ずる 110 ㊦句点が読点になっている。 111 ㊦読点あり。 112 ㊦㊦読点あり。 113 そう—㊦さう ㊦ソー 114 ㊦㊦句点が読点になっている。 115 ㊦読点なし。 116 そう—㊦さう ㊦ソー 117 此—㊦此の 118 ㊦㊦句点あり。 119 ㊦読点なし。 120 ㊦読点なし。 121 ㊦読点がが句点になっている。㊦読点なし。一字空白あり。 122 此—㊦此の 123 ㊦読点あり。 124 其—㊦其の 125 ㊦読点なし。 126 ㊦読点が句点になっている。 127 此か—㊦此が 128 ㊦句点が読点になっている。 129 其—㊦其の 130 ㊦読点あり。 131 こんな—㊦コンナ 132 ㊦㊦読点あり。 133 ㊦読点なし。 134 後から後から—㊦後から後から 135 ㊦読点なし。 136 ありました—㊦ありま た 137 ㊦読点が句点になっている。 138 建立しとやう—㊦㊦建立しやう

と思ふ¹³⁹て居る間は、此¹⁴⁰難を免れませぬ、¹⁴¹何が善だやら悪だやら¹⁴²、何が真理だやら¹⁴³非真理だやら、何が幸福だやら不幸だやら、一つも分るものではない¹⁴⁴。¹⁴⁵我には何にも¹⁴⁶分らない、¹⁴⁷となつた¹⁴⁸処で、一切の事を挙げて、悉く之を如来に信頼する、¹⁴⁹と云ふことになつた¹⁵⁰のが、私の信念の要点¹⁵¹であります。

第三¹⁵²。¹⁵³私の信念は、¹⁵⁴どんな¹⁵⁵ものであるか、¹⁵⁶と申せば、如来を信する¹⁵⁷ことである。¹⁵⁸其¹⁵⁹如来は私の信ずることの出来る¹⁶⁰又信せざる¹⁶¹を得ざる所の本体である。¹⁶²私の信ずることの出来る如来と云ふのは、私の自力は何等の能力もないもの、自ら独立する能力のないもの、其¹⁶³無能の私をして私たらしむる能力の根本本体が、即ち如来である。¹⁶⁴私は何が善だやら、¹⁶⁵何が悪だやら¹⁶⁶¹⁶⁷何が真理だやら¹⁶⁸何が非真理だやら、何が幸福だやら¹⁶⁹何が不幸だやら、何も¹⁷⁰知り分る¹⁷¹能力のない私、随て善だの悪だの¹⁷²真理だの、¹⁷³非真理だの、幸福だの不幸だの、¹⁷⁴と云ふことのある世界には、左へも右へも、前へも後へも、どちら¹⁷⁵へも身動き一寸とすることを¹⁷⁶得ぬ私。¹⁷⁷此¹⁷⁸私をして、¹⁷⁹虚心平氣に、此¹⁸⁰世界に生死することを得せしむる¹⁸¹能力の根本本体が、即ち私の信ずる如来である。¹⁸²私は此¹⁸³如来を信せず¹⁸⁴しては、生きても居られず。¹⁸⁵死んで往くことも出来ぬ。¹⁸⁶私は此¹⁸⁷如来を信せず¹⁸⁸しては居られない、¹⁸⁹此¹⁹⁰如来は、私が¹⁹¹信ぜざるを得ざる所の如来である。¹⁹²

139 思ふ—①思う 140 此—①此の 141 ①読点が句点になっている。 142 悪だやら—①悪やら 143 ①読点あり。 144 でない—①ではない 145 ①句点が読点になっている。 146 何にも—①ナンニモ 147 ①読点なし。 148 なつた—①なりた 149 ①読点なし。 150 なつた—①なりた 151 大要点—①大要点 152 第三—①そこで第三 153 ①句点なし。一字空白あり。①句点が読点になっている。 154 ①読点なし。 155 どんな—①ドンナ 156 ①読点なし。 157 信する—①信ずる 158 ①句点が読点になっている。 159 其—①其の 160 ①読点あり。 161 信せざる—①信ぜざる 162 ①句点が読点になっている。 163 其—①其の 164 ①句点が読点になっている。 165 ①読点なし。 166 悪だやら—①悪たやら。 167 ①①読点あり。 168 ①読点あり。 169 ①読点あり。 170 何も—①ナンニモ 171 分る—①分くる 172 ①①読点あり。 173 ①①読点なし。 174 ①読点なし。 175 どちら—①どちら 176 一寸とすることを—①一寸することを ①一つもすると 177 ①①句点が読点になっている。 178 此—①此の 179 ①読点なし。 180 此—①此の 181 得せしむる—①得しむる 182 ①句点が読点になっている。 183 此—①此の 184 信せず—①信ぜず 185 ①①句点が読点になっている。 186 ①句点が読点になっている。 187 此—①此の 188 信ぜず—①信ぜず 189 ①読点が句点になっている。 190 此—①此の 191 私—①私の 192 ①句点が読点になっている。

私の信念は¹⁹³大略此の如きものである。¹⁹⁴第一の点より云へば、如来は¹⁹⁵私に対する無限の慈悲である。¹⁹⁶第二の点より云へば、如来は¹⁹⁷私に対する無限の智慧である。¹⁹⁸第三の点より云へば、如来は¹⁹⁹私に対する無限の能力である。²⁰⁰斯くして²⁰¹私の信念は、無限の慈悲と²⁰²無限の智慧と²⁰³無限の能力との実在を信する²⁰⁴のである。²⁰⁵無限の慈悲なるが故に、²⁰⁶信念確定の其²⁰⁷時より、如来は、²⁰⁸私をして直ちに²⁰⁹平穩と安樂とを得せしめ²¹⁰たまう²¹¹。²¹²私の信ずる如来は、来世を待たず、現世に於て²¹³既に大なる幸福を私に与へたまふ。²¹⁴私は²¹⁵他の事によりて²¹⁶多少の幸福を得られないことはない。²¹⁷けれども²¹⁸如何なる幸福も、此²¹⁹信念の幸福に勝るものはない。²²⁰故に信念の幸福は、私の現世に於ける最大幸福である。²²¹此は私が毎日毎夜に実験しつつある所の幸福である。²²²来世の幸福のことは、私は、²²³まだ²²⁴実験しないことであるから、此処に陳る²²⁵ことは出来ぬ。²²⁶次に²²⁸如来は²²⁷、²²⁹無限の智慧であるが故に、常に私を照護して、邪智邪見の迷妄を脱せしめたまふ。²³⁰従来²³¹の慣習によりて、私は知らず識らず、研究だの考究だのと²³¹色々無用の論議に陥り易ひ²³²。²³³時には、有限粗造²³⁴の思弁によりて無限大悲の実在を論定せんと企つることすら起る。²³⁵然れども、信念の確立せる幸には、たとへ²³⁶暫く此の如き迷妄に陥ることあるも、亦²³⁷容易く其²³⁸無謀なることを反省して、此の如き論議を抛擲することを得ることである。²³⁹「知らざるを知らずとせよ、是れ知れるなり²⁴¹」²⁴⁰とは²⁴²実に人智の絶頂である。²⁴³然るに²⁴⁴我等は容易に之に安住す

193 ㊦読点あり。 194 ㊦句点が読点になっている。 195 ㊦読点あり。 196 ㊦句点が読点になっている。 197 ㊦読点あり。 198 ㊦句点が読点になっている。 199 ㊦読点あり。 200 ㊦句点が読点になっている。 201 ㊦読点あり。 202 ㊦読点あり。 203 ㊦読点あり。 204 信する—㊦信ずる 205 ㊦句点が読点になっている。 206 故に、—㊦故への、 207 其—㊦其の 208 ㊦読点なし。 209 直ちに—㊦直に 210 得せしめ—㊦得しめ 211 たまう—㊦たまふ 212 ㊦句点が読点になっている。 213 ㊦読点あり。 214 たまふ。—㊦たまう、 215 ㊦読点あり。 216 ㊦読点あり。 217 ㊦句点が読点になっている。 218 けれども—㊦ケレト 219 此—㊦此の 220 ㊦句点が読点になっている。 221 ㊦句点が読点になっている。 222 ㊦句点が読点になっている。 223 ㊦読点なし。 224 まだ—㊦マダ 225 陳る—㊦陳ぶる 226 ㊦句点が読点になっている。 227 次に如来は—㊦改行している。 228 ㊦読点あり。 229 ㊦読点なし。 230 たまふ。—㊦給ふ。㊦たまう、 231 ㊦読点あり。 232 易ひ—㊦易い 233 ㊦句点が読点になっている。 234 粗造—㊦麁造 235 ㊦句点が読点になっている。 236 たとへ—㊦タトへ 237 亦—㊦亦た 238 其—㊦其の 239 ㊦句点が読点になっている。 240 「」—㊦『』 241 ㊦句点あり。 242 ㊦読点あり。 243 ㊦句点が読点になっている。 244 ㊦読点あり。

ることが出来ぬ。²⁴⁵私の如きは、実に嗚呼がましき²⁴⁶意見を抱いたことがありました。²⁴⁷然るに、信念の幸恵により、今は、²⁴⁸愚癡の法然坊²⁴⁹とか、愚禿の親鸞とか云ふ御言葉を、ありがたく喜ぶことが出来、又²⁵⁰自分も²⁵¹真に無知を以て甘んずることが出来ることである。²⁵²私も以前には²⁵³²⁵⁴有限である²⁵⁵不完全であると云ひながら、其²⁵⁶有限不完全なる人智を以て、完全なる標準や、無限なる実在を研究せんとする迷妄を脱却し難いことである²⁵⁷。²⁵⁸私も以前には、真理の標準や善悪の標準が分らなくては²⁵⁹、天地も崩れ²⁶⁰社会も治まらぬ様に思ふ²⁶¹たることであるが、今は真理の標準や善悪の標準が、人智で定まる筈がないと決着して居ります。²⁶²扱²⁶⁴又²⁶⁵如来は²⁶³無限の能力であるが故に、信念によりて、²⁶⁶大なる能力を私に賦与したまう²⁶⁷、²⁶⁸私等は通常²⁶⁹自分の思案や分別によりて、進退応対を決行することであるが。²⁷⁰少し複雑なことに²⁷¹なると²⁷²思案や分別が、²⁷³容易に定まらぬ様になる。²⁷⁴それが為に、段々研究とか考究とか云ふことをする様になると、而して、前に云ふか²⁷⁵如き標準とか、²⁷⁶実在とか云ふ様なことを²⁷⁷求むることになりて見ると、行為の決着が次第に六ヶ敷²⁷⁸なり、何をどう²⁷⁹すべきであるやら²⁸⁰殆んど²⁸¹困却の外ない²⁸²様なことになる。²⁸³言葉を慎まねばならぬ、行を正く²⁸⁴せねばならぬ、法律を犯してはならぬ、道德を壊りてはならぬ、礼儀に違ふて²⁸⁵はならぬ、作法を乱してはならぬ、自己に対する義務、他人に対する義務、家庭に於ける²⁸⁶義務、社会に於ける義務、親に対する義務、君に対する義務、夫に対する義務、妻に対する義務、兄弟に対する義務、朋友に対する義務、善人に対する義務、悪人に対する義務。²⁸⁷長者に対する義務、幼者に対する義務等、所謂人倫

245 ㊦句点が読点になっている。 246 嗚呼がましき—㊦をこがましき 247 ㊦句点が読点になっている。 248 ㊦読点なし。 249 法然坊—㊦法然房 250 ㊦読点あり。 251 自分も—㊦自らも 252 ㊦句点が読点になっている。 253 私も以前には—㊦人智は 254 ㊦読点あり。 255 ㊦読点あり。 256 其—㊦其の 257 ある—㊦あった 258 ㊦句点が読点になっている。 259 分らなくては—㊦分らなくなつては 260 ㊦読点あり。 261 思ふ—㊦思う 262 ㊦句点が読点になっている。 263 扱又如来は—㊦改行している。 264 扱—㊦サテ 265 ㊦読点あり。 266 ㊦読点なし。 267 たまう—㊦給ふ 268 ㊦読点が句点になっている。 269 ㊦読点あり。 270 ㊦㊦句点が読点になっている。 271 複雑なことに—㊦複雑なに 272 ㊦㊦読点あり。 273 ㊦読点なし。 274 ㊦句点が読点になっている。 275 云ふか—㊦云ふが 276 ㊦読点なし。 277 ㊦読点あり。 278 六ヶ敷—㊦六ヶ敷く 279 どう—㊦ドー 280 ㊦㊦読点あり。 281 殆んど—㊦殆ど 282 外ない—㊦外はない 283 ㊦句点が読点になっている。 284 正く—㊦正しく 285 違ふて—㊦違うて 286 於ける—㊦対する 287 ㊦㊦句点が読点になっている。

道德の教より出づる²⁸⁸所の義務のみにても、之を実行することは²⁸⁹決して容易のことでない。²⁹⁰若し真面目に之を遂行せんとせば、終に「不可能」²⁹¹の嘆に帰」する²⁹²より外なきことである。²⁹³私は此の「不可能」²⁹⁴に衝き当りて、非常なる苦み²⁹⁵を致しました。²⁹⁶若し此の如き「不可能」²⁹⁷のことの為に、どこ迄も²⁹⁸苦まねばならぬ²⁹⁹なれば³⁰⁰、私はとつくに³⁰¹自殺も³⁰²遂げたでありませう。³⁰³然るに、私は宗教によりて、此³⁰⁴苦み³⁰⁵を脱し、今に自殺の必要を感じませぬ。³⁰⁶即ち、私は無限大悲の如来を信する³⁰⁷ことによりて、今日の安楽と平穩とを得て居ることあります。³⁰⁸無限大悲の³⁰⁹如来は、如何にして、³¹⁰私に此³¹¹平安を得せしめ³¹²たまふ³¹³か、³¹⁴外ではない、一切の責任を引受けて³¹⁵くださる³¹⁶ことによりて、私を救済したまう³¹⁷ことである。³¹⁸如何なる罪惡も、如来の前には、³¹⁹毫も障りにはならぬことである。³²⁰私は善惡邪正の何たるを弁ずるの必要はない、³²¹何事でも、私は只自分の気の向ふ所³²²心の欲する所に順従ふて³²³之を行ふ³²⁴て差支はない。³²⁵其³²⁶行ひが³²⁷過失であらうと³²⁸罪惡て³²⁹あらうと、少しも懸念することは入らない³³⁰。³³¹如来は私の一切の行為に就て³³²責任を負ふ³³³て下さることである。³³⁴私は只此³³⁵如来を信するのみにて、常に平安に住することが出来る。³³⁶如来の能力は無限である。³³⁷如来の能力は無上である。³³⁸如来の能力は一切の場合に遍満してある。³³⁹如来

288 出づる—㊦出づる 289 ㊦読点あり。 290 ㊦句点が読点になっている。 291 「不可能」—㊦不可能 ㊦『不可能』 292 帰」する—㊦㊦帰する 293 ㊦句点が読点になっている。 294 「不可能」—㊦不可能 ㊦『不可能』 295 苦み—㊦苦しみ 296 ㊦句点が読点になっている。 297 「不可能」—㊦不可能 ㊦『不可能』 298 どこ迄も—㊦どこ迄も 299 苦まねばならぬ—㊦苦しまねばならぬ ㊦苦まねばならぬ 300 なれば—㊦ならば 301 とつくに—㊦トツくに 302 自殺も—㊦自殺でも 303 ㊦句点が読点になっている。 304 此—㊦此の 305 苦み—㊦苦しみ 306 ㊦句点が読点になっている。 307 信する—㊦信ずる 308 ㊦句点が読点になっている。 309 無限大悲の—㊦改行している。 310 ㊦読点なし。 311 此—㊦此の 312 得せしめ—㊦得しめ 313 たまふ—㊦たまう 314 ㊦読点が句点になっている。 315 引受けて—㊦引き受けて 316 くださる—㊦下さる 317 たまふ—㊦たまう 318 ㊦句点が読点になっている。 319 ㊦読点なし。 320 ㊦句点が読点になっている。 321 ㊦読点が句点になっている。 322 ㊦読点あり。 323 順従ふて—㊦順従うて ㊦順ふて 324 行ふ—㊦行う 325 ㊦句点が読点になっている。 326 其—㊦其の 327 行ひが—㊦行が 328 ㊦読点あり。 329 罪惡て—㊦㊦罪惡で 330 入らない—㊦いらない 331 ㊦句点が読点になっている。 332 ㊦読点あり。 333 負ふ—㊦負う 334 ㊦句点が読点になっている。 335 此—㊦此の 336 ㊦句点が読点になっている。 337 ㊦句点が読点になっている。 338 ㊦句点が読点になっている。 339 ㊦句点が読点になっている。

の能力は十方に亘りて、自由自在無障無礙に活動したまふ³⁴⁰、³⁴¹私は此³⁴²如来の威神力に寄托³⁴³して、大安楽と大平穩とを得るこである³⁴⁴。³⁴⁵私は私の死生の大事を此³⁴⁶如来に寄托して、少しも不安や不平を感じる³⁴⁷ことがない。³⁴⁸「死生命あり、富貴天にあり³⁴⁹」³⁵⁰と云ふことがある。³⁵¹私の信する³⁵²如来は、此³⁵³天と命との根本本体である。³⁵⁴

生死の苦海ほとりなし ひさしく沈める我等をば
弥陀弘誓の船のみぞ のせてかならず渡しける。³⁵⁵

340 たまふ—①給ふ ④たまう 341 ①読点が句点になっている。 342 此—①此の
343 寄托—④乗托 344 得るこである—①④得ることである 345 ④句点が読点になっ
ている。 346 此—①此の 347 感する—①感ずる 348 ④句点が読点になっている。
349 「」—④『』 350 ①句点あり。 351 ④句点が読点になっている。 352 信する
—①信ずる 353 此—①此の 354 ④句点が読点になっている。 355 ①④<生死の苦
海ほとりなし ひさしく沈める我等をば 弥陀弘誓の船のみぞ のせてかならず渡しける。>なし。